

## 鹿児島県霧島市霧島温泉郷： 広域温泉観光の現状と課題

### 1 形成

2005（平成17）年の1市6町による広域合併で誕生した霧島市は、鹿児島県本土中央部に位置し、面積は約604km<sup>2</sup>で東京都23区の面積に近い。人口は約13万人であり、鹿児島県第2の都市である。1934（昭和9）年に日本で初めての国立公園の1つとして制定された「霧島」は、1964年に屋久島地域等を加えて「霧島屋久国立公園」となったが、2012年に屋久島地域が分離独立し、「霧島錦江湾国立公園」として鹿児島・宮崎両県境の霧島火山地域と桜島を含む錦江湾地域からなる国立公園となった。霧島市内には環境省指定「国民保養温泉地」の霧島温泉郷と隼人・新川渓谷温泉郷の2ヵ所がある。

霧島山系から裾野と平野部を経て錦江湾まで流れる清く豊かな天降川流域の豊かな田園が広がり、山麓から平野部まで様々な泉質の温泉群があつて、海・山・川・森・田園・都市などからなる多彩で豊かな地域である。農林畜産や水産業でも歴史と実績があるが、京セラやソニーなどのIC製造産業も国内重要拠点となっている。また、前田終止霧島市長が「霧島市の基幹産業は観光である」と豪語するように、鹿児島県および南九州の観光拠点としての霧島市の役割は大きい。交通体系も九州縦貫自動車道や東九州自動車道の高速道が整備され、鉄道は開業百余年の歴史を誇る肥薩線や宮崎に伸びる日豊本線などもあり、2011年に鹿児島まで開通した九州新幹線の意義は大きい。鹿児島国際空港も霧島市に位置し、鹿児島のみならず九州の南の玄関口としての役割を担っている。

### 2 現状

優れた環境と立地に恵まれた霧島市であるが、宿泊客数の減少傾向は止まらない。

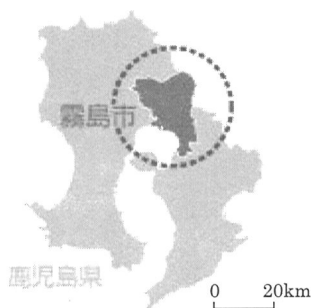
1990年に放映されたNHK大河ドラマ「翔ぶが如く」の翌年の実績130万人をピークに減少を続け、2010年では60万人に半減するという厳しい現実と直面している。しかし、団体客向けの宴会型から個人客や体験観光などの着地型観光に取り組み、新しい観光にシフトしようとしていた矢先、霧島連山の新燃岳が約300年ぶりのマグマ噴火を起こした。皮肉にも、宮崎県で発生した口蹄疫による移動自粛があり、観光業界の大打撃から官民一体の施策取組で観光客の回復が見え始めていたタイミングでの噴火となった。一部に「空振」によるガラス破損などは出たが、幸い観光客の人的被害や降灰などの直接的被害はなかった。しかし、過激な報道による「風評被害」で大きな宿泊予約キャンセルを受け、対前年9割強減という、これまでに経験したことがない厳しい状況となった。観光客激減による影響は、様々な産業分野にまでわたり、「観光業は総合産業である」という事を証明した形となった。その逆境からの起死回生を願って迎えた待望の九州新幹線開業も、2011年3月、東日本大震災発生の翌日ということで、静かにスタートすることになった。「九州新幹線開業」の波及効果は大きく、観光面でも人々の流れを大きく動かすことになった。2012年度上期には、新幹線開業効果もピークを過ぎたと報告されているが、裏を返せば、やっと団体専用臨時列車が運行できる環境が整ったことであり、2013年度は西日本の新幹線沿線地域から「修学旅行」などの新規需要が増加すること決定している。また、空の便も近年大きく様変わりしている。いわゆるLCC（ローコストキャリア）の就航であり、霧島はLCC便を活用する新たな国内需要に注目している。2013年5月からはジェットスターによる鹿児島～成田便

も開設となり、関西空港や神戸空港を拠点とした近畿エリアから関東エリアへと拡大しようとしている。また、2011年度末に就航した国際便の鹿児島～台北定期便も大きな話題となっている。搭乗率も好調で、さっそく2012年度下期初頭には週3便から4便体制に増便されることとなった。台湾では大河ドラマ「篤姫」が数度再放送され、鹿児島の知名度向上に貢献していると聞く。観光客は九州新幹線の登場により、九州内の「縦軸移動」の時間短縮で、福岡イン鹿児島アウトなどの多彩な選択肢を持つこととなった。今後も新しいマーケットに新しい観光ルートの案内をしていかなければならない。もはや、1つの自治体や県単位での宣伝ではカバーできない時代ではなかろうか。それらを視野に入れたPR戦略を立てなければならない「霧島の観光」であるが、行政や観光協会などの取り組みは恒常的に限界が見えている。この現場の意識改革が出来るかどうか、今後の観光浮揚の実現にかかっているのである。

### 3 課題

今後、国内需要の落ち込みをカバーし、現状の年間延宿泊客数を維持していくために

は、これまで霧島温泉郷ではあまり積極的に展開しなかったインバウンド対策に目を向ける必要がある。国際情勢の諸問題が発生すると渡航数が激減するリスクも残るが、例えば、近年の霧島では韓国からの冬季ゴルフ客が増加しており、すでにブームではなく定着している。加えて、昨年度より九州観光推進機構などの関係機関と連携して実施している「九州オルレ」（ウォーキングコースプラン）が、韓国からの旅行者に注目されている。昨年初めて九州内に4ヵ所開設された第1次コースでは、多くの韓国人が参加した。そして、2012年度の第2次コースとして、霧島市から「霧島妙見コース」（約11km）が選定され、2月末にコースオープンとなった。九州内の8つのオルレコースの中で、空港まで車で15分圏内にあるコースは、霧島妙見コースが初めてである。今後の展開については期待と不安が混同するところであるが、まずはウォーキングで疲れた身体を霧島の温泉で癒していただき、その泉効をじっくり体感してもらい、九州のリピーターとなっただきたいと考えている。まさに、オール九州での対応が試されているのである。



霧島市の位置  
(霧島市資料)

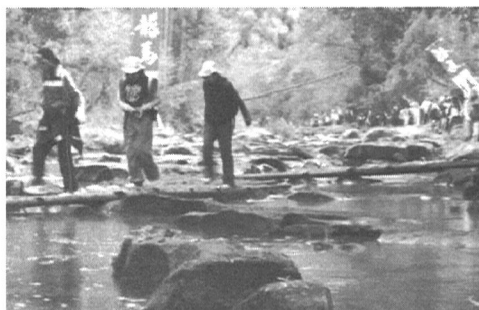


写真 ジオパークでの散策  
(筆者撮影)

(只野公康)

# 温泉地域研究

# 別府温泉郷におけるボランティアガイドの動向と課題

## A Study on the Trend and Problems of the Voluntary Tour Guide in Beppu Spas

中山 昭 則\*  
Akinori NAKAYAMA

キーワード：別府温泉郷 (Beppu spas)・ボランティアガイド (voluntary guide)・地域資源 (regional resources)・まち歩き (strolling on the street)

### 1 研究背景と問題の所在

今日、全国各地でボランティアガイドが活躍しており、その組織数はおよそ1,600、ガイド数42,000人を数える<sup>1)</sup>。これらボランティアガイドは、その数から察すれば地域観光の発展に重要な役割を担っているものと考えられ、また、組織運営も多様化している。日本観光振興協会は、ボランティアガイドを「人に自慢できる豊かで楽しいまちづくりに寄与するという社会的事業に自発的に参加する人」と定義づけている(加藤2003)。しかし、同協会が開催していた全国大会は2010(平成22)年に群馬県渋川市で開催された大会が最後となっている<sup>2)</sup>。この大会が終了した要因として、林他は「組織数の増加がボランティアガイドの性格・定義を曖昧にさせてしまった」点を挙げている(林他2012)<sup>3)</sup>。

本論が取り上げる大分県別府温泉郷のボランティアガイドの組織数は、11にのぼる<sup>4)</sup>。一つの自治体の中でこれだけの組織が共存している所は他に類を見ない<sup>5)</sup>。別府温泉郷のような全国有数の大温泉観光地において、幾つもの観光ボランティアガイドが活動を始めた経緯については、既に筆者が取り上げている(中山2006)。

ボランティアガイドに関する研究としては、加藤他(2003)が全国663組織を対象

とした調査を行っている<sup>6)</sup>。この論考は、1980年代中頃の黎明期から年代を追ってボランティアガイド組織の展開について検討している。これによると、1980年代は全国でもまだ40程度の組織に留まり、観光志向は低く目的性が高いことが特徴的であった。1990年代に入ると、観光志向が高まるとともに行政の補助も始まり、組織化されていく時期であったとしている。この傾向はその後も進み、個人の知識活用というボランティア的な活動から、「まちづくり」という地域貢献としての活動へと広がった。

先に挙げた松村他(2001)は、近畿地方の4つのボランティアガイド組織を対象に調査を進めた上で、組織運営のポイントとして「自発性から始まる自主的な運営」「社会貢献によって生きがいを感じる」「得意分野を持ち寄り役割分担する」などを挙げている。この「社会貢献によって生きがいを感じる」という側面は、林他(2012)による横浜市のボランティアガイド組織を対象とした調査によっても裏付けられている。これによると、活動の目的は「観光客と地域住民のため」および「地域住民のため」の二者が大半を占めていると指摘している。中山(2006)は、ボランティアガイドは“自分だけの秘密の場所”を見出し説明することに意義を見出し、

\*別府大学 (Beppu University)



参加者は“自分だけが知っている場所”を見出せることを望んでいる。両者の思惑の場所が一致した時、存在意義が見いだせるとしている。しかし、その後の実態調査ではマニュアル依存度が強まり、最大の見せ所である“秘密の場所”を見出すことが困難になってきていると指摘する（別府大学地理学研究室 2010）。

ボランティアガイドのスキルについては、各組織をはじめ行政等による講習・研修が年々充実しレベルアップが図られている。前述の横浜市では育成期間が2年間にも及ぶが、大半のガイドはその育成期間を「ちょうど良い長さ」と回答し、勉学意欲の高いことを示している。先に取り上げた加藤他(2003)は、ボランティアガイドとしての専門的な知識と参加者を楽しませる技術の両方が必要となる解説活動が重要であると指摘している。

以上の先行研究を踏まえて、本論は温泉地域という他所と比べると観光資源・地域資源に優位性を持つ場所におけるボランティアガイドの組織運営の実情について検討し、ボランティアガイドの意義と課題を明らかにすることを目的とする。

研究を進めるにあたって2012年2月から5月にかけて11組織の代表者とガイドを対象としてアンケート調査を実施した。その結果、6組織の代表者、ガイド個人からは8組織42名の回答を得た。さらに、別府温泉郷のボランティアガイドの草分け的な存在で一般の観光客の参加が多い「語り部の会」と、地域密着型のツアーを展開してリピーター率の高い「あさみウォーク」を事例として検討していきたい。

## 2 別府温泉郷におけるボランティアガイドの概要と現況

### (1) ガイド組織全体の概要

別府温泉郷におけるボランティアガイドは、2001年市観光協会主催の「観光ガイド養成講座」参加者の有志が「語り部の会」を

組織し、ツアーを始めた。そして、同年から始まった「別府八湯温泉泊覧会（オンパク）」との連携によって、別府八湯全域に広がっていった（浦 2006）。2012年現在、別府温泉郷で11組織がボランティアガイドを催行し、ガイド数はおよそ130人である（図1）。また、ツアーの年間参加者は約8,000人とされている。

一方、2012年2月に各組織の連携が図ら

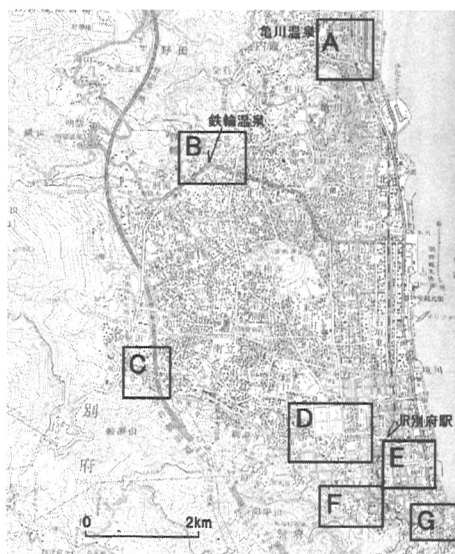


図1 別府温泉郷における主なボランティアガイドツアー実施地域（2012年）

れ、「ボランティアガイド連絡協議会」が発足した。協議会にはウォーキング協会、別府湾クルージング組織、学生団体も参加しており、幅広く参加を呼びかけた様子が伺える。このことは集結した意義・目的を拡散させてしまう可能性も生じ、今後協議会の運営には工夫が必要となろう。

### (2) ボランティアガイドの構成

まず各組織の現況をみていきたい。現在のボランティアガイドの年齢構成は、20歳代から80歳代まで幅広い年齢層にわたっているが、60歳代以上が51%を占めている（表1）。ガイドたちの大半はガイドをしている地域、つまり地元の居住者が70%を占める<sup>7)</sup>。男女比をみると、男性が66%を占めている。

ボランティアガイドツアーは毎週4日間催行しているBを除けば、月1～2回の催行が多い(表2)。これは回答を寄せなかった組織も同様である<sup>8)</sup>。ガイドツアーはすべての組織が有料で、保険料とお茶・おやつが付いて700円徴収している所が多い。有料でツアーを催行している組織数は全国総数の40%なので、別府温泉郷のように地域挙げて有料でツアーを催行している事例は少ないのかもしれない<sup>9)</sup>。また、所属するガイドの中で頻繁に活動に参加するガイドは「毎回ほぼ全員が活動している」組織と「限られたガイドが活動を支えている」組織とに分かれた。

また、ツアー催行時に動員するガイド数も組織によって差がある。動員数の最も多いAはガイド1名、ガイド補助1名、交通整理3

名、飲食物の手配1名の計6名体制で臨んでおり、毎回全員で取り組んでいる。この組織はガイド数も現況で適正であるとの回答を寄せている。これはツアー催行が月一回なので現体制で維持できているといえよう。しかし、大半の組織はツアー催行に際して1～2名程度で臨んでいる。内訳はガイド1名と交通整理1名で共通する。このような態勢では、参加者の安全対策と事故防止対策に課題が残ると思われるが、ガイド数について人数不足を訴えている組織が複数あるものの、現体制で適正と回答した組織もあった。

### (3) 組織別にみたツアー参加者の動向

各組織へのボランティアガイドツアー参加者の動向についてみていきたい。先ず参加者数の動向についてみよう(表3)。

表1 組織別年齢構成(2012年)

組織 \ 年代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳～	計
A		1	2		2	1	6
B	1	3		4	3	6	17
C				6	2	2	10
D		1		3	6		10
E				2	4	1	7
F			3	2	2		7
計	1	5	5	17	19	10	57

(注) 各団体代表者アンケート調査より筆者作成。

表2 ツアー催行日とガイドの活動状況

組織	ツアー催行日	参加料金	活動頻度の高いガイド数*	ツアー動員ガイド数
A	第1日曜日	1,000円	5 < 6 >	6
B	月、水、金、土、日曜日	700円	14 < 17 >	決めていない
C	第2、4日曜日	700円	3 < 10 >	2
D	第3日曜日	700円	3 < 10 >	2～3
E	予約制	2,000円	2 < 12 >	2
F	第3日曜日	700円	7 < 7 >	1

(注1) 各団体代表者アンケート調査より筆者作成

(注2) 参加料金にはお茶とおやつ付き。Eのみはなし。

(注3) \*欄の< >は所属するガイドの総数。

表3 組織別にみたツアー参加者の動向（2011年度）

組織	平均参加者数	最大参加者数	年間参加者数	リピーター率	参加者の主な居住地
A	35人	113人	611人	80%	別府市・大分県・福岡県
B	15	20	1100	25	大分県・別府市・北九州市
C	5	50	未回答	25	大分県・宮崎県・その他
D	15	50	230	70	別府市・大分市・大分県
E	10	120	300	10	別府市・大分市・大分県
F	15	30	未回答	5	大分市・福岡市・福岡県

(注) 各団体代表者アンケート調査より筆者作成。

1回あたりの参加者は5名以下から40名程度と幅がある。1回あたりの参加者数の多いAおよびEは、これまで受け入れた最大人数も120名、113名と多いことから団体参加者も多く受け入れていると考えられる。平成23年度の参加者数は回答を寄せた5組織の合計で4,241人である。参加者数の動向をみるとEへの参加者が多い。リピーター率は5～25%とのグループと70～80%のグループに大別される。別府市外からの参加者が多い組織ではリピーター率は低く、その反対のパターンではリピーター率は極めて高い。この調査結果から、ガイドツアーのリピーターは地元の人々が主体となっていると考えられる。次に、参加者の居住地（出発地）および年齢層についてみると、別府市内在住者の参加が最も多いグループと大分県内居住者の参加が多いグループに大別できる。概して県外居住者の占める割合はそう高くはないようである。参加者の年齢層は中高年女性がいずれの組織においても上位を占め、次いで中高年男性が多く、参加者の大半は中高年齢層で占められている。

#### (4) ガイド組織の運営実態と課題

ガイドの研修については、概して頻繁に実施している様子はなく、EとFは「ガイドが現在持っているスキルで十分であるので実施していない」との回答をしてきた。ガイドのスキルが高いことは、日頃の自己研鑽の積み重ねと意欲の高さを示すものである。今後は自己点検（評価）を絶えず行うことが望まれる。また、リピーター率の高いツアーは、案

内の仕方やコース設定に毎回工夫が必要となり、ガイドの知識量もそれなりのものが求められると考えられる。しかし、アンケート回答を見る限り、こうした観点で研修を行っている様子は伺われず、研修内容はガイドのスキルアップや知識補充が中心となっている。つまり、参加者のニーズをリサーチするといったことはほとんど行われていないようである。また、ツアー時の説明内容（セリフ）はBを除く5組織が現役のガイドが作成していると回答を寄せた。案内箇所とコースの設定については、6組織全てが大まかな案内場所は決めているが、実際にはガイド個人の裁量に任せていると回答している。このことから、ガイドの一方的な説明に陥らないように細心の注意が必要であると考えられる。

このガイド個人の裁量の大きさが、前述の研修の状況に反映していると思われる。ガイドの個性とスキル（解説力）および知識量に委ねる方法も独自性が出て評価できようが、組織としてのスキルを維持していくチェック態勢は必要であろう。加えて、後述する実態調査で明らかになったが、個々のガイドの得意分野とそうでない分野の説明にはかなりの差が出ている。これもガイドの個性という範疇に入れて得意分野の説明に特化させるのか、また、ガイドの育成および確保の方法については、Bのように毎月発行される市報に掲載して募集している組織があるが、「必要時になったら町内会から推薦してもらい、ガイドになることを説得する」「ツアーに参加した地元住民を勧誘する」といった内向きな

方法に拠る処が大きく、説明会の開催や積極的なPRを行っているとの回答はなかった。

現在組織が直面している問題については、B・D・E・Fの4組織が「人員確保」と「世代交代」を挙げている。ガイドの年齢構成からすれば、各組織で当然持ち上がってくる課題であろう。しかし、前述のように積極的な若返りと人員補強策を講じている様子は伺われない。2012年2月に初めて開催された連絡協議会総会開催もボランティアガイドのPRという理由も多分に含まれていた<sup>10</sup>。しかし、総会の状況はやや一方的なアピールが多く、参加者が関心を示すであろう「お金で買えない達成感」や「実際の活動と苦労話」に対する説明は不十分であったと思われる。

別府温泉郷で活動する組織全体の課題としては、各組織間の連携と情報の共有を訴える代表者が多かった。限られた地域で11組織が活動をしているので、それぞれが個性を異にする地域のガイドを実践しているといえど

も、お互いの特性や課題・悩みを相対化して活動の糧にしようとすることは当然の成り行きである。こうした事態をスキル改善要素として取り組むべきか、今後の議論が必要となるだろう。

### 3 ツアー催行の実態

#### (1)「語り部の会」および「あさみウォーク」の概要

語り部の会主催のツアーはリピーター率が25%程度と低く、一般の観光客の参加が多いと考えられる。ガイドもツアーコースエリアに居住する者は少なく、市内のみならず大分市や県外から通って来ているガイドもいる。語り部の会は「竹瓦路地裏散歩」を催行しており、2012年はおよそ1,100人の参加者があった。ツアーコースはJR別府駅を起点として駅周辺の路地裏を巡りながら明治期以降の建造物と共同温泉を巡るものである(図2)。



図2 竹瓦界隈路地裏散歩ツアーコース  
(2012年10月参加コース)  
(注)別府市1万分の1都市計画図により筆者作成。

まず、図中①の駅前高等温泉は今日別府温泉郷を代表する温泉施設でガイドブックでも必ず取り上げられている。②の国際民宿は廉価で宿泊できるので外国人旅行者に人気が高い。④の梅園温泉周辺は、路地裏の風情を残すエリアであり、ツアーの売り物である。④

最近ではガイドブックを片手に、この境界を歩く観光客の姿も見られる。このことは語り部の会のツアーから“路地裏”が観光資源化されたことを意味している。⑥～⑭のエリアは、戦前から高度経済成長期までは北浜温泉と浜脇温泉の中間点として大変な賑わいを見せていたが、わずかに残るその面影を巡っている。ゴールの⑬は別府を代表する竹瓦温泉である。地元では、ここを“温泉の聖地”と銘打って売り込んでいく計画が持ち上がっている。

ツアーは毎週月・水・金・土・日曜日の5日間実施しており、市内の各ツアーの中ではツアー催行回数は群を抜いて多い。現在ガイドは17名を擁しているが、3名は長期間活動に参加していない。したがってツアー回数多さゆえにガイド不足の状態にあり、あと5名程度の増員を望んでいるという。

語り部の発足は前述のとおり有志が立ち上げたもので、ボランティアガイドの草分けの

存在と言える<sup>11)</sup>。ガイドたちの意欲も高く、市内居住者のみならず、このツアーに参加した県外居住者（愛媛県宇和島市）もガイドとなっている。ツアーコースも経験の蓄積からほぼ固定化されている。所属のガイド個別アンケートの回答をみる限り、ガイド各自が説明に特に力を入れる場所を持つというよりも、コース全体を万遍なく説明しているようである。このことから、ガイドのスキルと意識が一定水準で統一されている様子がうかがえる。

これに対して、あさみウォークのリピーター率は70%を占め、地元住民と別府市民が繰り返し参加している。ガイドも全員地元朝見地区に住んでいる。このように、ガイド組織とツアー参加者の属性は、語り部の会とは対照的である。また、このツアーは「別府の原点・朝見郷」と銘打っており、別府の総鎮守『朝見八幡神社』をツアーコースのメインとしている（図3）。この朝見八幡神社をはじめとした地区内の寺社は、近年パワースポットとして注目を集め、若者のツアー参加者が増加傾向にある。ガイドたちの多くは最も力を入れて説明している場所として当神社を挙げている。

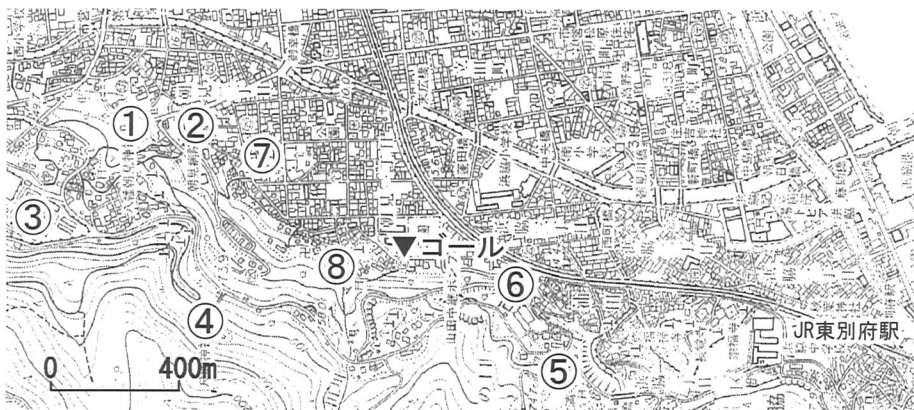


図3 あさみウォークツアーコース  
(2012年10月参加コース)  
(注) 別府市18分の1都市計画図により筆者作成。

②～⑧のポイントは、いずれもガイドブックにも紹介されていない場所である。②の朝見病院は1898（明治31）年の開院で、かつてはこの周辺には治療や付添、見舞い人のための旅館が数軒存在した。③の朝見浄水場は県の近代化遺産に選定されている。⑥は全国に4ヵ所しかないマザー・テレサゆかりの旧白百合愛児園である。このように、いわゆる“隠れた名所”的なポイントが点在する。

あさみウォークの参加者は、年間通しても250名程度で推移しているという。ガイド組織も2008年に設立され、本格的なツアーは翌2009年からスタートさせたばかりで市内で最も新しい組織である。ガイド組織設立は、朝見地区が「中心市街地活性化計画」区域から外れたことが背景にある。地域の活性化策を自分たちの手で実施する必要性に迫られ、その一環としてガイド組織が設立された。

この地区は大発展を遂げた温泉観光都市別府にあって、旧来型の観光施設や資源に乏しい地区とされてきた。地元住民は「地元を知る絶好の機会」としてツアーに参加しているという。また、ガイドたちは説明に工夫を凝らしていることが、リピーター率の高さにつながっていると分析しているようである。

## （2）ツアー内容の比較と課題

ここで、両組織のツアーの内容をみると、両者ともにその日の担当ガイドや参加者数、そして天候によってコースや説明場所と内容を少しずつ変えている。その判断は基本的に担当ガイドに任されている。案内箇所によっては当事者がいる場合は説明をお願いすることもあるという。例えば、今回参加した語り部のツアーでは、紙屋温泉と羽衣温泉で管理人から説明がなされた。しかし、両温泉ともに管理人が常駐しているわけではないので、このような説明がなされない日も多いという。また、「貸席旅館アホロトル」の名前の由来といった参加者が関心を示すであろう事柄についての説明はなかった。このような担当ガイドによる説明の力点の差は、あさみ

ウォークでも見られた。例えば、参加当日のガイドは元水道関連の仕事をしていたという「浄水場」の説明が詳しくあったが、その他宝満寺に詳しいガイドもいるとのことである。

このように、ガイドによって得意分野、コースと案内場所が変わるということは、参加者にしてみれば「行ってみなければわからない」という状況にあるともいえよう。ホームページにも担当ガイドに関する情報は掲載されていない。これに対して、あさみウォークでは2013年から月別にテーマを設定して催行している。その結果、1月の「七社参り」には27名、2月の基本コース「パワースポット巡り」には21名の参加があった。前年の2ヵ月の実績29名を大幅に上回り、順調な滑り出しといえよう。今後は、別府で最古の寺院である宝満寺および別府市街地の眺望をテーマとしたツアーを企画している。

一方、コースの設定に関する「新たに案内してみたい場所がありますか」の質問に対する回答は、両者は対照的なものであった。語り部の会のガイドたちからは新たに案内したい場所は全く挙がってこなかったが、あさみウォークのガイドは「乙原の滝」「志高湖」「隠山」が挙がった。語り部の会のコースは『路地裏』をキーポイントとしており、その周辺の案内場所も従来から別府を象徴する建造物が多く、新しい説明ポイントは見出しにくいと考えているようである。一方、あさみウォークのコース周辺はこれまで観光資源として活用されてきたものがほとんどないことが背景にあらう。「乙原の滝」は既に新コースとして試験的に実施している。しかし、健脚向けのコースで片道1時間という歩行時間が課題となっている。

このツアーコースの歩行距離については、語り部の会のホームページには3kmと明記されているが、あさみウォークには記載がない。参加者の大半が中高齢者という現状を鑑みると歩行距離は重要な情報と考えられる。この語り部の会の3kmという距離は、例え



ば各コースが1.5km前後で設定されている「長崎さるく」と比較すると長い。あさみウォークの歩行距離もツアーに参加してみて、やはり3km程度はあろう。ガイドたちが実地の場で苦労している“長い行列”が出来るしまうのは歩行距離の長さにも一因がある。

### (3) 今後の展望

ツアー催行の実情から見えてきた課題を今後の活動にどのように活かすべきか。先ず個々のガイドが各自の得意分野の説明に偏る傾向を指摘したが、ガイドの個性を活かすならば、例えばホームページに得意分野を持つガイドのスケジュールを掲示することも考えられよう。さらに、所属するガイドの得意分野を把握することによって、どの分野のガイドを今後育成・募集すべきかという点も明確になろう。また、各組織の連携を図れば同じ分野を得意とするガイドたちのスキルアップも効率的に出来よう。同一分野を得意とするガイドたちをリレー形式で繋ぐことも可能ではないか。松村がガイド組織運営のポイントの一つとして指摘する「得意分野を持ち寄り役割分担する」という点は、別府温泉郷においても検討しなければならないであろう。各組織には「歴史が得意なガイド」、「寺社が好きなガイド」といったように得意分野を持つガイドが所属しているので、“自己完結型”の精神を尊重しつつも連携し、そして連動した活動も視野に入れるべきと考える。

次に、ツアーコースの歩行距離の長さも指摘したが、現状を見る限り「1回のツアーですべてを案内する」傾向が強い。3kmという距離は夏場の参加者は当然であるがガイドとその補助者にとっても辛いのではなかろうか。市内の他のツアーコースも、ほぼ同じ歩行距離である。距離が長くなれば参加者の歩くペースにも差が生じ、安全確保の面においても不安が募る。前述した「長崎さるく」のように、歩行距離を1.5km程度にしてテーマ別のコースを設定することも考えられる。

例えば、語り部会のコースならば「路地裏」と「レトロな建物」「昔ながらの共同温泉」の3コース設定も可能と考える。あさみウォークでは「パワースポットをめぐる」「近代化遺産ツアー」といった設定が考えられる。しかし、これには人員確保という課題が残る。募集に際しては「短いコースで得意分野を活かして説明できる」というフレーズで募集をすれば可能性は見えてこよう。

## 4 まとめ

以上、別府市各地で活動しているボランティアガイドの活動実態について検討を加えてきた。その結果、以下の知見を得ることができた。

- ①ガイドの高齢化は、すべての組織が課題として捉えている。70歳以上のガイドは全体の18%を占め、60歳以上を加えると51%を占めている。しかし、ガイドの育成に関しては現在の人員が適正と考えている組織も多く、その捉え方は組織によって異なっている。
- ②ガイドの多くは地元居住者が占めており、加えて地元ガイドに勧められてガイドになった者が最も多い。つまり、地元のガイドツアーに参加するなど、ガイド組織と何らかの接点を持った住民が、そのままガイドになっている事例が多い。
- ③ガイドたちの多くはツアーの引率(説明)に際して、所属組織が作成したマニュアルに加えて独自に説明資料を作成している。ここが引率するガイドの個性がツアーの看板になり得る一方、ガイドによる説明内容・密度に差が生じることにも繋がるかもしれない。
- ④ガイドの育成については、総じて積極的に対策を講じているとは言い難い。ボランティアガイド活動の醍醐味、ガイド活動は地域社会との接点を高める可能性を秘めていることなどの説明がやや不足している。
- ⑤ツアー催行の実態をみると、担当ガイドによって説明箇所やコース設定に違いが生じている。さらに、その情報はほとんど提示され

ていない。また、ツアーの歩行距離も他地域の同様のツアーと比べると長い。その一方で、コースにテーマを持たせて催行する動きも見られ、今後の動向に注目したい。

課題としては、各組織ともに総じて解説スキルの向上という視点にまで至っていない点があげられる。ガイド個々の知識と個性に委ねるツアーは確かに魅力的ではあるが、参加者あつてのツアーである。また、今後ガイドツアーが人気を呼ぶほど各ガイドの“秘密の場所”は多くの参加者に知れ渡ることになる。これからは「場所の発掘」から「説明の工夫」に重心を移していかなければならないと考える。各ガイドの説明スキルの客観的な測定方法の構築も視野に入れる必要がある。

各組織ともに、運営はいわば“自己完結”的な色彩が強いと思われる。この「地域のことは地域住民で」というスタンスは別府温泉郷で展開するボランティアガイドの特性であり“売り”でもあつて評価できよう。また、他地域に多く見られる行政主導のもとで活動する場合、予算削減に伴う活動の縮小もしくは休止という事態に陥るリスクを背負っている。しかし、ここでは各組織独立採算なので、このようなリスクはかなり少ないという利点もある。

ガイドの高齢化と人員不足を多くの組織が直面する課題として挙げているが、その実効性のある対策を十分に講じているとは言い難い。とりわけ、人材育成は「必要性が生じたら地元住民から探している」というのが実情といえよう。

最後に、別府温泉郷という限られた空間に15コースのガイドツアーを催行するという地域的特性を活かすためにはリピーターの発掘が欠かせない。「次はあのコースを巡ろう」という気にさせる仕掛けが必要ではないか。そのためにはガイドのスキルアップ（自己研鑽）の実情を検証する必要がある。ガイドたちがどのような資料・データ・情報を基に説明資料を作成しているのか検証しなければな

らない。ガイドの育成についても各組織によって背景が異なることが見えてきたので、その実態も検証する必要がある。

## 謝辞

本研究を進めるにあたって、別府市観光協会および別府市ボランティアガイド連絡協議会からアンケート実施の機会を設けて頂いた。また、各団体の皆様からにはアンケート調査に快く協力して頂いた。この場をお借りして御礼申し上げます。

## 注

- 1) 日本観光振興協会が平成24年1月時点で調査した。同協会 HP ([www.nihon-kankou.or.jp](http://www.nihon-kankou.or.jp)) にアップされている。組織数は・ガイド数
- 2) 日本観光振興協会が平成24年1月時点で調査した。同協会 HP ([www.nihon-kankou.or.jp](http://www.nihon-kankou.or.jp)) にアップされている。組織数は・ガイド数
- 3) 前掲1) による。
- 4) 別府市ボランティアガイド連絡協議会にはこの他「別府ウォーキング協会」や「立命館アジア太平洋大学」などが加わっているがここでは除外した。
- 5) 例えば、大阪市は「大阪あそ歩」が150コース、長崎市の「長崎さるく」では36コースがボランティアガイドツアーとして設定されている。
- 6) 当時の日本観光協会に登録されていた組織数である。
- 7) ボランティアガイド個別のアンケート調査による。
- 8) ボランティアガイド組織共有の HP 「別府八湯ウォーク ([walk.bepu-navi.jp](http://walk.bepu-navi.jp))」による。
- 9) 前掲1) による。
- 10) 「別府八湯ウォーク連絡協議会」開催者からの聞き取り調査より。
- 11) 中山 (2006) 参照



## 参考文献

- 1) 加藤麻理子他 (2003) : 「地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究」ランドスケープ研究 : 日本造園学会誌 66(5), 799 ~ 802 頁、社団法人日本造園学会。
- 2) 茶谷幸治 (2012) : 『「まち歩き」をしかけるーコミュニティー・ツーリズムの手ほどき』学芸出版社、全 186 頁。
- 3) 松村直美ほか (2001) : 「ボランティアガイドの活動から見るガイド成功要因とまちづくりへの影響に関する研究」平成 13 年度日本建築学会近畿支部研究報告集、489 ~ 492 頁、日本建築学会
- 4) 林 懿嫻 (2012) : 「横浜市の観光ボランティアガイド組織に関する研究 : その育成方式を中心にして」観光科学研究 (5)、95 ~ 106 頁、首都大学東京 大学院都市環境科学研究科 観光科学域。
- 5) 中山昭則 (2006) : 「観光・地域づくりと住民参画・別府温泉郷における市民による地域ガイドの事例 -」、『観光からの地域づくり戦略』総合観光学会編、159 ~ 172 頁。
- 6) 別府大学地理学研究室 (2010) : 「地域ボランティアガイドの現状とその意義~別府市朝見ウォークを事例として~」『研究年報第 8 号』別府大学地理学研究室編著、9 ~ 13 頁。
- 7) 浦 達雄 (2006) : 「別府温泉の観光地域づくり - 地域住民の活動中心として -」、『観光からの地域づくり戦略』総合観光学会編、123 ~ 137 頁。

# 中国・湯崗子温泉の発達過程と保養・療養的利用

## Development Process of Tanggangzi Spa in China and its Utilization for Recreation and Cure

于 航\*  
YU HANG

キーワード：湯崗子温泉 (Tanggangzi spa)・発達過程 (development process)・温泉保養療養的利用 (hot spring utilization for recreation and cure)

### 1 はじめに

中華人民共和国成立以後の温泉利用の歴史を振り返ると、中心的な役割は労働者の温泉療養であった。東北地方の遼寧省は重工業基地として機能してきたので、産業労働者のための福祉施設として温泉療養院が各温泉地に多数設立された。当時、中国全土の療養院の約半数は遼寧省にあり、工業労働者の温泉療養が20世紀初頭の早くから盛んであった。また、予防医学の見地から中国東北地方の温泉の保養機能も強かった。しかし近年、中国の経済力向上によって多くの温泉地が観光化され、温泉地本来の療養機能が失われつつある。観光客の誘致に精力を注ぎ、外来資本の誘致に目が向けられているので、地域住民の保健・福祉のための温泉資源利用の面から、いま一度中国の温泉地の療養・保養的利用について再認識することが求められている。そこで、代表的な遼寧省鞍山市湯崗子温泉を選んで、発達過程と療養・保養的利用の状況を明らかにし、その意義を考察する。

### 2 湯崗子温泉の発達過程

遼寧省鞍山市の中心から12km離れた南郊にある湯崗子温泉は、毎年多数の人が訪れている。この温泉には豊富なミネラル物質が含まれ、泉源が72℃もある貴重な温泉資源

として利用されてきた。何千年も前の火山灰をそのまま利用している天然熱鉱泉泥と治療技術が高く評価されているほか、長い歴史があるので独特な温泉文化も注目されている。その発達過程は以下のように整理できる。

#### (1) 第2次世界大戦前

##### 1) 古代

湯崗子温泉は中国の有名な温泉地の1つに数えられる。長い歴史の中で、温泉が発見された時代を示す具体的な歴史資料はないが、「中国名勝詞典」に「金天会八年(1130年)、太宗曾赴此温湯」の記述がある。遼・金時代、現在の湯崗子温泉付近に「湯池県」が設立され、この名前の由来も「泉」から命名された。清時代には、今の湯崗子鉄道の西側と娘娘廟山東側の間に、地元と周辺の住民約1万人が、自発的に1年をかけて、乾隆皇帝が先祖の発祥地である瀋陽の墓参りに行く途中に湯崗子温泉を訪ねるための「御道」を作ったという伝説も残されている。

##### 2) 植民地時代

植民地時代は湯崗子温泉発達史の中で、最も重要な部分である。日本人やロシア人により、約10年間をかけて建設され、経営されてきた湯崗子温泉は、当時満州とモンゴル境内にいるロシア人、日本人及び満州の貴族・官僚・商人たちの間に宣伝されていた。北満

\*城西国際大学 (Josai International University)

州各地をはじめ、遠く天津・青島・上海からの外国入浴者も殺到し、満州植民地時代の避暑・療養の楽園になっていた。湯崗子温泉は当時の満州にある熊岳温泉や安東五龍背温泉とともに「満州三大温泉」と数えられた。1905（明治38）年8月10日、日本軍隊大山大将の司令部は大連から湯崗子温泉に移設され、ここに「満州軍総司令部」が設立した。当時、日本軍は湯崗子温泉を「陸軍転地療養所」として兼用した。1921年、東北軍閥張作霖は中国趣味を採り入れた中国古代式的な3階建て、内部は洋式の龍泉別荘を作ったが、これはその後、湯崗子温泉株式会社の経営のもとに高級旅館として利用された。内部には洋式29、うち1等客室が10部屋、家族浴室が3部屋あり、大浴場が1つあった。

20世紀初期、日本の「満州・湯崗子温泉株式会社」は当時の専務児玉翠靖の名前を使って、玉泉館（4病室）と対翠閣（5病室）を建てた。最初の建築費用は18万元であり、その他、火力発電、内部設備などの費用を合わせて、およそ30万元を費やした。「対翠閣」は破風宮殿造りの建物で、内部は和洋折衷風、客室31部屋と大広間1つがあった。大理石で作られた豪華な浴室5つのほか、大浴場が2つあった。また、清の末代皇帝愛新覺羅溥儀を長期に監禁するため、「対翠閣」本来の建築様式を保持するとともに「龍宮温泉」が新設された。そのなかで、末代皇帝溥儀や皇后婉容と大臣たちの入浴用に、「龍池」「鳳池」と「五大臣池」が設置された。1931年11月13日と1932年3月6日、愛新覺羅溥儀、皇后婉容及び満清の大臣たちは湯崗子温泉の「対翠閣」を訪れ、1週間ほど滞在したことが歴史の記録にある。「満鉄株式会社」は当時、湯崗子温泉と附属地区を「満鉄中央公園」として建設することを計画し、公園事務所を設立した。1919年7月、日本の林学博士に温泉を中心にした運動場・野球場付きの公園デザインを依頼した。さらに、様々な樹木を植える計画にも入れており、公園の面積は

536,764 m<sup>2</sup>に及んだ。南満州鉄道株式会社が出版した『満州温泉案内』には、湯崗子温泉について「池は釣魚、ボート遊びに適し、テニスコート・小運動場などの戸外運動設備はもとより、ダンスホール・ビリヤード場そのほか、室内遊戯も完備している」と紹介されていた。

## （2）第2次世界大戦後

新中国成立後の湯崗子温泉は、歴史の長い大規模国有療養院としての特性を持ちながら、以下のような発達過程をたどった。①温泉療養院建設期（1949～1958年：社会主義建設期）、②温泉療養院発展停滞期（1959年～1977年：3年自然災害と文化大革命期）、③温泉療養院観光地萌芽期と発展期（1978年～2003年：鄧小平と江沢民の指導の下での改革開放初期と深化期）、④温泉療養院の再編成期（2003年～胡錦濤の「東北工業基地を振興期」）のように区分することができよう。

### 1）温泉療養院建設期（1949年～1958年）

この時期には、8年間の中日戦争、4年間の国内戦争を経て、新しい中国—中華人民共和国の成立を迎えた。建国初期の「一窮二白」、「百業待興」の状況下で、東北地方遼寧省の鞍山市は中国鉄鋼業・石炭業などの重工業地域として、大勢の労働者が集中していた。「工人階級領導一切」という社会主義制度の指導下で、産業労働者階級を高い社会地位に位置づけ、旧ソ連や東ヨーロッパの温泉地をモデルにして、新しい温泉療養院が全国的に建設された。その利用状況をみると、新中国建設期において過去の戦争で負傷した人々や英雄、現場の模範労働者など、戦傷者の治療と回復、労働者たちの疲労解消に温泉療養院が大きな役割を担っていた。このような歴史的背景のもとで、1949年人民志願軍が湯崗子温泉施設を接收し、1950年5月に東北人民政府健康委員会湯崗子温泉療養院（現在の玉泉館、龍宮賓館、医院オフィス・ビル、治療室など）と命名した。1954年に東北総工会

工人療養院（現在病院の南七、八、九、十療養棟）が建設され、1956年に中国煤鉍工人湯崗子療養院（現在北側家族寮）も増設された。1958年に以上の3つの療養院を合併し、現在の湯崗子温泉療養院の前身となった。1950年代末まで中国全土に約100カ所の温泉療養院が誕生した。当時、湯崗子療養院の規模は3つの病棟、300のベッドしかなかったが、普通患者の療養には約3ヵ月を要するのが一般的であった。さらに、1950年に勃発した朝鮮戦争で負傷した傷病兵が多数収容された。

## 2) 温泉療養院発展停滞期(1960～1977年)

1959年から1961年の間に、「三年自然災害」「三年経済困難」時期と呼ばれた災害に襲われ、農作物の不作で食料が不足し、全国で餓死した人数は1,500万人を超える極めて厳しい時代であった。さらに、60年代以後、中国とソ連との関係悪化や1966年から1977までの10年間も続いた文化大革命の政治闘争により、この時期の全国の温泉療養院は停滞した。『湯崗子温泉院誌』には、1976年の唐山大震災の傷者450名を受け入れたことのほかに、この時期の記録はほとんど記されていない。

## 3) 湯崗子温泉療養院観光地萌芽期と発展期(1978～2003年)

1978年以後、鄧小平指導のもとに展開されてきた「改革開放政策」によって、中国は新しい歴史時代に入った。特に江沢民時代の社会市場経済理論の指導のもと、経済力が著しく発展した。しかし、80年代初期、遼寧省の国内生産総額は全国3位であったが、1990年と2003年には、第5位から第8位までに落ち込んだ。80年代の遼寧省の国内生産額は広東省の2倍に相当していたが、現在広東省は遼寧省の2倍を上回っている。改革開放以来20年の間、深圳を代表する珠江三角洲と上海を代表する長江三角洲の猛成長率に比べて、公有体制や産業構造の矛盾は重工業基地である東北三省の発展を制約する原

因になっていると言えるであろう。特に、大型国営企業は90年代後半からさらに苦しい状況に陥ってしまった。

したがって、国営企業としての湯崗子温泉療養院は、外国や香港・マカオの資本を受け入れて急激な観光地化を遂げた中国南部の温泉地とは、かなりの発達格差が認められる。また、国有企業と公的事業機関における医療制度の改革、すなわち、国営企業が職員の医療費用を全額負担から職員の個人部分及び全部を払う医療保険制度を導入するようになったのである。温泉療養費が高騰し、そのために温泉療養者数が減少して、温泉地の性格は大きく変化した。この時期の湯崗子温泉周辺には、共産党鞍山市委員会組織部の老幹部療養院、鞍山市役所農業委員会所属の聚龍賓館、鞍山市交通警察大隊湯崗子温泉療養院と軍隊温泉療養院など、国家公務員の福祉のために行政各機関が医療機関とは異なる保養院を造ってきた。これらの保養院の成立により、以前からの公務員療養客の一部が流出した。

## 4) 温泉病院の再編期(2003年以後)

1978年の改革開放以来、中国の主な経済成長は沿海部、特に珠江三角洲と長江三角洲を中心として展開したが、1998年には「北西部を開発する」政策が確立された。また、2003年に中国共産党「第十六三中全会」で胡錦濤が国家主席となり、北東部と北西部は中国经济発展の両輪であり、「東北部重工業基地を振興する」政策も打ち出された。特に、中央政府は東北三省に集中している国有企業の再編成を図り、資源の再分配などについて検討する姿勢が強まった。病棟のひとつの龍宮科室の元医師英桂清が、病院側に年間50万円納付することを契約し、龍宮賓館を請け負って医者と看護婦付きの賓館式病棟に変換した。その後、1,200万円を使って観光客用にホテル内部を新装した。さらに、急激に増えた観光客のニーズを対応できなくなり、長春熱力会社との合資経営に変わったのを契機に、2001年には3星クラスのレベルを目指

して大規模な内部改造を始めた。龍宮の営業面積は1931年建築当時の5,000㎡から、改造後2002年には7,500㎡に拡大され、ここに湯崗子温泉の経営が観光化へと大きく変質したことが明らかとなった。その他、現在の玉泉館は韓国真誠株式会社と療養院側のそれぞれが出資し、共同で建築された営業面積7,000㎡を超える3階建ての高級客用の療養

施設として運営されている。また、湯崗子温泉内部では、「鞍山市湯泉旅行有限公司」が設立され、医療制度改革によって患者が激減した空部屋の多い焼傷科病棟・頸肩科病棟・糖尿病科病棟・皮膚科病棟を有効に再利用するため、「康復旅遊」の一環として、家族旅行・会社団体慰安旅行の客や長期滞在客たちに庶民的な値段で安く提供されている。

表1 湯崗子温泉の発達過程

時代	分期	年	湯崗子の出来事	世の中の出来事	
古 代	唐 遼 金 清	1130	唐の太宗李世民が湯崗子訪問 湯崗子付近に「湯池県」設立 乾隆は湯崗子に3度立ち寄る		
		植 民 地 時 代	1900	ロシア将軍「官兵療養所」建設開始	
			1905	日本軍隊司令部湯崗子で「満州軍総司令部」「陸軍転地療養所」設立	
1909	満鉄奉天公所所長佐藤安之助が「清林館」を完成				
1920	満州・湯崗子温泉株式会社創立、「玉泉館」「対翠閣」開設				
1921	東北軍張作霖により「龍泉別荘」開設				
1929	鉱泥場完成				
1931～ 1932	清の末代皇帝溥儀、湯崗子温泉「対翠閣」2度滞在				
新 中 国 成 立 後	建 設 期	1949	人民志願軍が湯崗子温泉施設を接收	中華人民共和国成立	
		1950	東北人民政府健康委員会が湯崗子温泉療養院と命名	朝鮮戦争	
		1951	抗美援朝志願軍の負傷者を收容し、朱徳総司令が慰問		
		1954	東北総工会工人療養院（現病院の南七、八、九、十療養棟）成立		
		1956	中国煤鉱工人湯崗子療養院（現北側家族寮）増設		
	1958	上記3療養院を合併、湯崗子温泉療養院の前身となる			
	停 滯 期	1959～		三年経済困難	
		1961			
		1966～ 1976		文化大革命	
	観 光 萌 芽 期	1976	唐山大震災の負傷者450名を受け入れ		
1978			改革開放政策		
1994		元医師英桂清が龍宮賓館を請負			
1995		韓国真誠株式会社と療養院側玉泉館を共同運営			
再 編	2002	「鞍山市湯泉旅行有限公司」成立			
	2003		工業基地振興		

(注)『湯崗子温泉療養院誌』などにより筆者作成。

### 3 湯崗子温泉の保養・療養的利用

#### (1) 温泉客の利用概要

湯崗子温泉は国営大型総合病院を中心として、長い間一般労働者たちに疲労回復の保養の場を提供してきた。また、温泉水や熱鉱泥を利用し、各種の物理的治療方法と中医治療方法を加えてリウマチなどの病気を治療するという、療養温泉地としての役割が強かった。しかし、競争が激しい現代社会においては、ストレス解消・健康増進・生活習慣病予防・観光など、利用目的も多様化してきた。病人から健康人まで、幅広く利用されるようになり、現在の湯崗子温泉は「休養」「保養」「療養」の場として大きな意義を有している。

知名度が高い湯崗子温泉療養院の素晴らしい医療技術は、遼寧省内のみならず国内外に広く知られている。療養と保養を目的に利用している客は、ほとんどが東北三省から来訪している。特に鞍山（海城・岫岩・台安を含む）は、医療保険の対象地区であるので療養客の8割を占めている。また、黒龍江省のハルビン、吉林省の長春、遼寧省の瀋陽や大連など、中国東北部の大都市、いわゆる建国初期に国営企業が集中していた地域からの定期的な保養客も少なくない。

#### (2) 温泉客の療養・保養的利用

湯崗子温泉療養院は成立初期の3つの病棟、ベッド数およそ300から、現在の10の病棟、ベッド数1,300もの大型総合慢性病治療医院として発展してきた。「中国四大理療康復センター」の1つに数えられている、遼寧省康復センターの所在地であり、中国衛生

部理療医師育成基地でもある。治療方法は水療法・泥療法・蠟療法・電療法など60種類の物理的療法と中国伝統的な中醫療法を中心に行われ、現在の療養院は康復科・骨傷科・リウマチ科・老年病科・軟組織損傷科・糖尿病科・皮膚科の7つの臨床部門と物理医学・運動医学・鍼灸医学・マッサージ医学の4つの治療科室で構成される。

湯崗子温泉の泉質は炭酸水素塩泉であり、72℃の高温泉が1日に600tも湧出している。1,300ベッドの収容力があり、1995年の年間療養客数は6,100人、一般に2～3ヶ月間の治療をするので延50万人にもなる。1999年では約6,500人の療養客が平均34日間滞在しており、ベッド利用率は80%であった。2000年から2002年の3年間の入院患者数を見ると、5,316人、7,582人、8,560人で大幅に増えている。ベッド使用率は59%、71%、67%であったが、平均滞在日数は2000年の37日から、2001年の28日、2002年の25日に減少している。

湯崗子温泉療養院は毎年多くの患者が訪れ、特にリウマチ・骨関節病・皮膚病などの治療と脳血管後遺症のリハビリを目的に来る人が多い。2002年の療養院側のデータによると、リウマチ29%、腰椎脱出病15%、骨関節病12%、頸椎病10%、皮膚病10%、心臓・脳血管病8%、老人病糖尿病6%の順であった。療養院の北側にある回復センターと隣の2病棟は主に脳血管病とやや重い病気の患者を収容しており、この区域は療養客が中心となっている。また、療養院南側にある

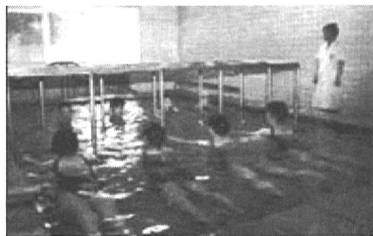


写真1 水中体操運動  
(湯崗子温泉資料)



写真2 温泉鉱泥利用の治療  
(湯崗子温泉資料)

七、八、九、十病棟は皮膚病・頸肩病・焼傷・骨傷などの長期滞在患者を収容する。南東側の東甲棟・東乙棟・西甲棟・西乙棟は糖尿病と老年病の患者を収容する施設である。しかし、近年の患者数の減少により、病室の使用率が減っているため、この状況を改善するために、これらの病棟の半分をオープンにし、

一般の保養客や観光客を受け入れようになった。保養目的で来た利用者とはいえ、1ヵ月～3ヵ月の長期滞在が多く、治療費用は病状によって、大体一ヵ月で1,000～1,500元、2ヵ月で月1,500～2,000元、三ヵ月で2,000～3,000元程度である。



写真3 保養客用の食堂  
(筆者撮影 2008年8月)

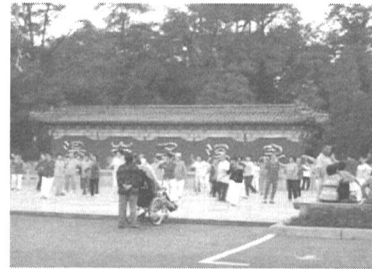


写真4 湯岡子温泉広場  
(筆者撮影 2008年8月)

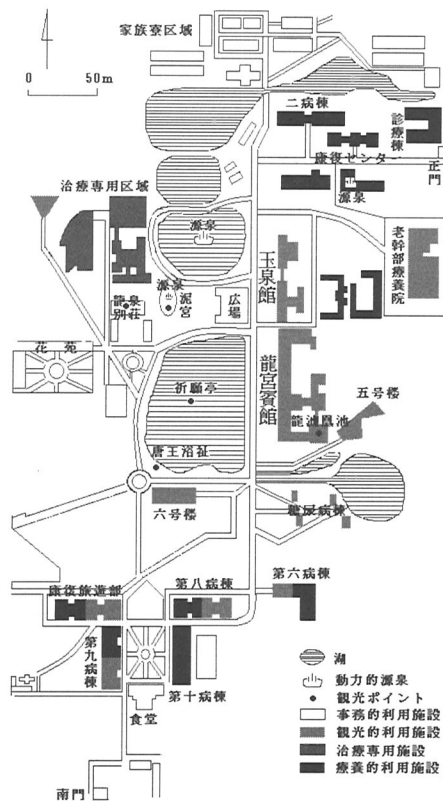


図1 湯岡子温泉療養院の施設分布図 (2005年)  
(筆者作成)

## 4 考察

日本の場合、ほとんどの国民保養温泉地に温泉医が常駐していないのは問題であると山村が述べたが、湯崗子温泉の場合は、専門医師・看護婦から、運動・栄養専門家まですでに1,000人以上の職員が常駐し、療養・保養客への指導のみならず、一般の観光客へのアドバイスも行われ、「健康観光」を目的に来た客にも大変満足されている。こうした湯崗子温泉のあり方は魅力的である。

2003年に北京小湯山温泉療養院がSARSの患者を収治すると決めたことから見ると、急に何らかの大規模な社会事件が起こった場合、国営療養院としての社会的「公益性」が機能していることを知り得る。湯崗子温泉療養院は1951年に抗米援朝志願軍負傷者を収治し、また1976年の唐山大震災の傷者450名を受け入れたことがあった。国営療養院は現代社会においても、緊急事態の際に、特殊な社会役割を担っているのである。

高齢・少子化社会が進む今日、高齢者たちは病院で充実した入院生活を送るため、医療施設の整備や医療水準の向上のほかに、患者の精神面にも配慮する必要がある。湯崗子温泉の場合は、院内の休憩の場である温泉広場で、毎日朝と夕方に専門医師指導の下で近接地域住民と滞在客が一緒になって健康体操や太極拳などを行っている。こうしたコミュニケーションをとることは、心身の癒しに大きな効果をあげている。滞在客と地域住民が触れ合う場を提供したことは、地域社会の活性化に有意義であることは疑いを入れない。

温泉歓楽や観光が始まって以来、療養院は温泉観光や歓楽を重視する傾向があるが、決して温泉の療養機能を軽視してはならない。つまり、療養院での療養機能としての施設空間を守っていくことが最も大切なのである。療養客が静かな空間を求めている一方、観光客はカラオケ・バー・ダンスホール・プールなどの遊興的機能の空間を追求している。したがって、療養院は今後の開発において、療

養客用施設と観光客用施設をバランスよく配置することを考えなければならない。日本の場合は、温泉地はもともと療養の場として利用してきたが、経済の発展とともに温泉地は観光化してきた。

今日の中国の現状と80年代の団体旅行が盛んであった高度経済成長期の日本とは非常に類似している。中国の療養温泉地が歓楽型温泉地に変わりつつある一方、近年の日本においては、温泉本来の療養・保養機能を再評価する傾向が強くなってきているのである。湯崗子温泉療養院でも、日本の経験を参考し、温泉の「核」である療養機能を守りながら観光機能を加えて、バランスよい開発を進めるべきであろう。

本稿は、2007年度に千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程に提出した学位論文の一部に加筆をしてまとめたものである。ご指導をいただいた山村順次千葉大学名誉教授に厚く御礼を申し上げます。

## 参考文献

- 山村順次 (1998) : 『新版 日本の温泉地 その発達・現状とあり方』。日本温泉協会、78頁。
- 王艶平 (2004) : 『中国温泉旅遊—地理学からの発見及び人文主義の挑戦』。大連出版社、157頁。
- 山村順次 (2004) : 『新版 世界の温泉地—温泉リゾートの発達と現状』。日本温泉協会、66頁。
- 山村順次 (2003) : 『湯治場の現代意義と課題』。総合観光研究、45頁。
- 王艶平・山村順次 (2001) : 『中国温泉資源の旅遊利用形式の変遷及び開發現状』。地理科学、21 (5)、421～428頁。
- 小胡日査 (1999) : 『中国内モンゴル阿爾山温泉地の形成と利用実態』。千葉大学教育学部地理学研究報告、第10号、41～50頁。
- 湯崗子温泉療養院 (2004) : 『内部資料』。1頁。
- 鞍山市史誌辦公室 (2001) : 『鞍山年鑑』。遼寧民族出版社、156頁。



鞍山市史誌辦公室（2002）：『鞍山年鑑』。遼寧民族出版社、139 頁

張楠・干航・山村順次（2011）：中国遼寧省湯泉谷温泉の開発と利用。温泉地域研究、第 16 号、31 ～ 42 頁。

# タイ・チェンマイ周辺における温泉観光開発 Spa Tourism Development in Chiang Mai Metropolitan Area, Thailand

浦 達雄\* 小堀貴亮\*\* ソンマイ テェイン テャエ\*\*\*  
パンティラー シンタイポップ\*\*\*\*

Tatsuo URA, Takaaki KOBORI, Sommai THEINGTHAE, Pantira SIGTAIPOB

キーワード：タイ (Thailand)・チェンマイ周辺 (Chiang Mai metropolitan area)・温泉観光開発 (spa tourism development)・経営動向 (business trends)

## 1 はじめに

### (1) 研究の背景

タイにおける主な温泉地は、北部のチェンマイ周辺・バンコク周辺・南部のマレー半島に展開している。タイには200以上の温泉地が成立していると言われるが、その過半数はタイ北部、中でもチェンマイ周辺に位置している<sup>1)</sup>。本稿では、北部のチェンマイ周辺における温泉を調査対象とした。チェンマイ東郊のサンカンペン温泉は最も有力な温泉として知られ、その実態はすでに発表した(浦達雄・小堀貴亮他 2012)。今回はチェンマイの北西部、さらに北東郊に位置する温泉を調査対象とした。具体的には、北西部に位置する秘湯系の施設と国立公園に属する施設、北東部に位置する施設の経営動向や観光客の実態を把握することにした。これによって、タイ北部における温泉観光開発の実態を明らかにし、将来的には、タイにおける温泉観光開発の地域的展開を明確にしたい。

### (2) 従来の研究成果

タイにおける温泉観光開発に関する論文は、観光地理学分野では数が限定される。浦達雄・小堀貴亮他 (2012) は、チェンマイ東郊のサンカンペン温泉を対象として、その観光開発の実態を明確にした。普及書・機関誌としては、前者には高橋由紀夫 (2008)、

後者には松下正弘 (2001) の著作がある。旅行記としては、浦達雄他 (2011)・浦達雄 (2011)・浦達雄 (2012)・浦達雄 (2013) などがあり、タイ北部の温泉の分布状況を明確にした図面として、地質調査所 (1987) がある。

### (3) 研究の目的と方法

本稿の調査対象地を選定した理由としては、チェンマイ周辺がタイにおける温泉集中地区であること、新旧の温泉施設が多いことなどである。これまでの研究では、温泉施設が集積するチェンマイ東郊のサンカンペンにおける温泉観光開発の実態報告があり(浦達雄・小堀貴亮他 2012)、今回はその継続調査である。研究の目的は、温泉の集中地区であるタイ北部のチェンマイ周辺地域、中でも北西郊、北東郊の温泉施設を事例として、観光開発の実態を把握することであり、調査の方法は文献調査、経営者や関係者に対する聞き取り調査、観察などを行ったが、聞き取り調査は経営者の不在もあって、不明な部分もあった。

## 2 チェンマイ周辺における温泉の概要

### (1) 温泉の展開

チェンマイ周辺では、東郊のサンカンペン

\*大阪観光大学 (Osaka University of Tourism) \*\* 共栄大学 (Kyoei University)

\*\*\* ラチャブリュックカレッジ (Ratchapruuek College) \*\*\*\* パンテラー旅行社 (Pantira Travel Agency)

温泉が知られる。リゾート型、コテージ型温泉施設が点在しており、立地状況や利用形態は様々である。

など多様な形態が整備されており、利用客も多い。さらには、北西郊・北郊・北東郊にも温泉施設が点在しており、立地状況や利用形態は様々である。

## (2) 立地動向

チェンマイ北西郊では、ポークアーン温泉とポーン・ドゥアット温泉が知られる。いずれも山間地に位置し、前者は秘湯系、後者は

国立公園に立地する温泉である。一方、チェンマイからチェンライに至る街道沿いに近接するドイサケット温泉はチェンマイの北東郊に位置し、気楽に利用出来る日帰り温泉として機能しており、観光客や入湯客が多い。その他の地域でも温泉が自噴しており、これを利用する温泉施設が徐々に増加している。泉質は硫黄系で、高温泉が多い。表1は、チェンマイ周辺における温泉施設の経営動向を整理したものである。以下、事例ごとに経営実態を説明したい。

表1 チェンマイ周辺の温泉施設の実態 (2012年)

温泉	ポークアーン (Pong Kwao)	ポーン・ドゥアット (Pong Dueat)	ドイサケット (Doi Saket)
開業年	2000年	1997年	1998年
経営者の出身地	バンコク (潮州系)	政府系	ドイサケット
開業時の職業	獣医 (公務員)	国立公園	農業、主婦など。村人6人で出資
開業動機	村人からの開発の依頼。	国王の姉が来園し、森林+温泉として、温泉施設が開発された。	暇な生活、仕事なしの状態から脱却するため、主婦のパワーが源。
投資額 (土地)	50万B	—	—
投資額 (建物)	—	—	—
敷地面積	10RAI	1,252.12 km <sup>2</sup> (公園面積)	7RAI
開発の歩み	1997年: 土地購入  2000年: 管理棟・レストラン・キッチン・WCなど整備 2003年: 大浴場・個室浴場・露天風呂・サウナ・マッサージルームなど整備 2007年: コテージ整備 2008年: 上流部にキャンプ場・打たせ湯など整備 2010年: ホテル形式の客室整備開始 2012年: ホテルの1階客室完成	1997年: 露天風呂・半露天風呂整備 その後、プール整備	1998年: 特別浴室・普通浴室整備 2005年: 売店など整備  国から村への地域整備費は年間20万B。  2013年: 河川の改良工事予定
温泉掘削年	サムーン川の河川敷から自然湧出	メーテーン川の河川敷から自然湧出	メーライ川源流で自然湧出
泉温	40～60℃、4月は70℃に上昇	90～99℃	84℃
源泉数	大きな孔3カ所、小さな孔数カ所存在	大きな孔2カ所、中規模な孔4カ所、小さな孔は無数。	2カ所 (温泉池を形成)
泉質	硫黄泉	硫黄泉	硫黄泉
入場料金	なし	40B (外国人は200B)	なし
温泉施設	大浴場 (2カ所)・個室浴場 (10カ所)・露天風呂・かけ湯施設・足湯など。	露天風呂 (男女別)・同半露天風呂 (1カ所)・プール (水着着用)	特別浴室 (2カ所)・普通浴室 (5カ所)

同料金	温泉施設 150B	露天風呂 50B・半露天風呂 20B・プール 20B	特別浴室 70B・普通浴室 30B
宿泊施設	コテージ 4 棟 ホテル 10 室（その他 7 室整備中） キャンプ場 30 テント	コテージ 8 棟 キャンプ場	キャンプ場
同料金	ホテル 1,500 B（1 人。食事無） コテージ 2,800B（8 人） 大部屋 300B（1 人） テント 250 B（食事、温泉付）	1 棟 4 人 2,000 B（食事無） テント貸出 350B（3 人用）・利用は 30B/ 人	テントの場所代は 50B
年商	—	—	50 万 B
オンシーズン	12・1 月	10 月～1 月（ピークは 12 月）	12 月・1 月
オフシーズン	6・7 月	6・7 月	4 月
顧客	タイ人が大半で、日本人や欧米人は少ない。（家族又はグループ）  キャンプ客が多い。	欧米系が多く、特に豪州からが目立つ。タイ人と日本人は少ない。  日帰り客の大半はジャングルツアー・ラフティング・山登りなど。	タイ人と日本人の利用が多く、欧米人はチェンライからの帰路に立ち寄るケースが大半。  温泉利用客と観光客が多い。
従業員数	8 人（多忙時は 4 人プラス） 給料は 250B/ 日	約 20 人（公園管理を含む）	約 20 人（女性が大半）
その他	温泉利用客は 1 日当たり少ない時で 5 人～10 人、多い時で 100 人。オンシーズンでは温泉入浴で行列が出来る。 サウナは村の指導者のもとで行われ、10 人以上の予約制で、利用料金は 50 B/ 人となる。  年間の宿泊客概数は、ホテル 200 人・コテージ 100 人・キャンプ 500 人（200 テント）となる。経営方針は自然を活かすこと、木を切らないこと。	ファイ・ナムダン国立公園に属する。ビジターセンターがある。散策コース・観察コースが整備されている。 メーテーン川の川岸で源泉湧出の見学が出来る。湧出の状況を掲示物で紹介している。	温泉利用客は 1 日当たり少ない時で 10 人～20 人、多い時で 100 人、普段は 20～50 人程度 別のグループの村人（6 人で出資）が 2002 年から温泉熱で蒸した竹の子を販売している。市場は主にチェンマイ方面。年商は 25 万 B。 2011 年、外来資本（ピサヌローク出身のタイ人）によって村内で温泉開発が行われた。土地は 2RAI で、開発の途中、経営者が死亡し、子息が経営を継いでいる。開発に反対が多いため、計画は中断。

注 1. 聞き取り調査により作成。ただし、ポークアーン温泉とポーン・ドゥアット温泉は経営者不在。

注 2. 数値は推定値。B=パーツ。1 B=約 2.5 円。

注 3. R A I は 1,600 m<sup>2</sup>。

注 4. 料金はタイ人の利用料金。

注 5. 一は未調査。

### 3 ポークアーン温泉

#### (1) 開発の概要

ポークアーン温泉は、チェンマイ北西郊 45km の山間部に位置する。ポークアーン村は、約 140 戸、約 500 人の集落で、生業は農業である。米・トウモロコシ・バナナ・果物・花卉類・野菜類・キノコ類などを生産し、牛や鶏を飼っている。界限にはゴルフ場・リゾート・別荘などが点在している。

温泉施設は 2000 年の開業で、当初は温泉がサムーン川に自然湧出するだけであった。当時、鹿や牛が川砂を餌として食べており、村人は温泉成分の存在を確認した。経営者はバンコク出身（潮州系）の獣医であり、彼は近くの村で別荘を建設して別荘生活を楽しんでいた。村人が温泉の存在を申し出て開発を決意し、1997 年に水田を購入した。敷地面積は 10RAI（1 RAI = 1,600 m<sup>2</sup>）で、購入

額は50万Bと言われる。

2000年には、管理棟・レストラン・キッチン・WCなどを整備した。観光客はキャンプ、村人はかけ湯を楽しんでいた。2003年、現在の温泉施設が完成した。大浴場・個室浴場・露天風呂・かけ湯施設などで、その他にマッサージルームなどが整備された。2007年には、下流の方でコテージ4棟を建設し、宿泊の需要に対応した。2008年には、上流部でキャンプ場を整備し、打たせ湯を付帯した。打たせ湯は現在故障したままである。2010年から2階建てのホテル形式の客室を1階で10室、2階で7室（キッチン付帯）を整備している。1階の客室はすでに完成しているが、2階は建設中である。

## (2) 温泉・宿泊施設関係

源泉数は大きな孔3カ所、小さな孔数カ所が存在する。泉質は硫黄泉、泉温は40～60℃で、夏の4月は70℃に上昇する。湧出量は不明である。温泉施設は大浴場(2カ所)・個室浴場(10カ所)・露天風呂・かけ湯施設などである。温泉タンクは2カ所設置しているが、現在、ホテル棟に1カ所を整備している。利用料金は、温泉150B、テント250B(食事・温泉付)、ホテル1,500B(1人・食事無)である。収容は120人程度で、テントは30張り、50人を収容できる。利用客は、温泉入浴の他にトレッキング・ハイキング・山登りの客である。かけ湯は村人の利用は無料である。

## (3) 経営数値

年商は不明である。12・1月の冬季がオンシーズンで、キャンプを楽しむ若者が多い。これに対して、オフシーズンは6月と7月の雨季となる。温泉利用客はタイ人が大半で、日本人は少ない。週末の利用が目立ち、日帰りの他には1泊や2泊の形態が目立つ。温泉利用客は1日当たり、少ない時で5人から10人、多い時で100人を数える。オンシーズンでは温泉入浴で行列が出来ると言う。年間の宿泊客概数は、ホテル200人・コテ

ジ100人・キャンプ500人(200テント)である。調査当日の利用客は、我々4人の宿泊客以外は、日帰り客だけで、チェンマイ在住のロングステイの日本人7人(ガイドを含む)、タイ人の若者1組(4人)、外国人1組(4人)で、いずれも車を利用していた。

## (4) その他

スタッフは、マネージャー2人、料理・雑用・掃除など6人(オンシーズンは4人プラス)で、その内、英語を話すスタッフが1人いる。スタッフの平均的な日給は250Bで、毎日が忙しくて休む暇はないとのことである。経営の方針は、自然を活かすこと、木を切らないことであり、電気は夜間のみ利用で19時から21時30分までが点灯時間となる。付帯施設のサウナは、村の指導者のもとで行われ、10人以上の予約制で、利用料金は50B/人となる。料理はスタッフ(農家の主婦)によるタイ料理で、地産地消である。

ポークアーン温泉のセールスポイントは山奥に位置する秘湯イメージである。交通条件の悪さがたまにキズであるが、この条件を超えた満足感が訪問時に味わえる。優れた自然環境、地産地消の生活はロングステイ・スロートーリズム・グリーンツーリズムの可能性を大いに残していると言えよう。

## 4 ポーン・ドゥアット温泉

### (1) 開発の概要

ポーン・ドゥアット温泉はチェンマイ北西郊48.5kmのファイ・ナムダン国立公園に位置する。温泉施設は1997年の開業で、開業動機は国王の姉が来園した際、温泉湧出に注目し、森林プラス温泉として整備が進められた。運営・管理は国立公園の管理事務所がする。

開業に際して、宿泊施設・温泉施設などを整備し、その後、プールを付帯した。温泉が湧出するメーテー川右岸には展示施設が整備され、源泉湧出現象などをパネルで図示し、詳細に説明している。元々温泉は村人が

かけ湯として利用していた。ファイ・ナムダン国立公園の入場料は外国人 200 B、タイ人 40 Bで、車は 30 B、ドライバーとガイドは無料である。

## (2) 温泉・宿泊施設関係

温泉はメーテーン川の河川敷からの自然湧出で、大きな孔 2 ヲ所、中規模の孔 4 ヲ所を確認し、小さな孔が無数にあった。泉温は 90～99℃で泉質は硫黄泉である。宿泊施設はコテージ 8 棟とキャンプ場からなる。調査当日は 6 棟が改築中で、2 棟は満室であった。コテージの利用は 1 棟 4 人 2,000 Bで、食事はレストランを利用する。キャンプ場の利用は 30 B/人で、テントの貸し出しは 350 B/3 人用である。温泉施設は、男女別露天風呂（水着着用）・露天風呂（混浴・水着着用・プール（混浴・水着着用）で、利用料金はそれぞれ 50 B・20 B・20 Bとなる。

## (3) 経営数値

年商は不明である。オンシーズンは 10 月から 1 月までの冬季で、12 月がピークとなる。オフは 6 月と 7 月で、雨期がやや弱い。国立公園としての利用はピーク時で 200 人程度を数える。その大半は温泉湧出の見学と入浴を行う。利用客は欧米系、特に豪州が多い。タイ人と日本人は少ない。大半が日帰り客で、ジャングルツアー・ラフティング・山登りなどの旅程の途中で立ち寄るケースが目立つ。彼らは宿泊先としてカレン族の村などを利用する。タイ人は 12 月と 1 月にキャンプを楽しむ。

## (4) その他

温泉は間欠泉で河川敷から数 m ほどの位置にあり、定期的に噴出している。間欠泉の展示施設で聞き取り調査を実施した。カナダ・カルガリーからの若い女性で、タイ滞在 20 日の内、15 日目にチェンマイからレンタルバイクでやってきていた。彼女の目的は間欠泉の見学と温泉プールの入浴であった。半露天風呂ではタイ人のカップルが入浴中であり、彼はバンコクで仕事をしており、現在帰

省中で、彼女と温泉浴を楽しんでいた。

ポーン・ドゥアット温泉は国立公園の中に位置し、自然公園として環境整備が進んでいる。遊歩道・掲示板などが充実しており、間欠泉の見学と温泉入浴が主な活動と言えよう。温泉の湧出現象を身近に観察し、掲示板で解説が行われているので、子供達に対しても教育的な効果は大きいと思われる。ただし、管理事務所のサービス体制がいま一歩である。お役所サービスを克服する必要がある。

## 5 ドイサケット温泉

### (1) 開発の概要

ドイサケット温泉はチェンマイ北東郊 20km に位置する。源泉はメーライ川の源流で湧出し、温泉は池を作り、小川となって流れている。温泉の小川は、現在、護岸の整備が計画されている。源泉は自然湧出で、その歴史は不明である。村人は第 2 次世界大戦後に温泉を活用し、生活水やかけ湯として利用していた。こうした温泉を村の人が有効活用することになった。村人のグループ（6 人で共同出資）は 1998 年に温泉施設を整備し、その後、売店やマッサージルームを付帯し、今日に至っている。開業動機は、暇な生活、仕事なしの状態から脱却するため、主婦のパワーが源となっている。

いま 1 つのグループ（6 人で共同出資）は、温泉熱を利用した蒸し竹の子の製造・販売を行なっている。源泉池に竹の子を蒸す簡単な作業で、2002 年に営業を開始した。こうした中で、外部資本が温泉観光開発に着手した。村人は大規模な開発に反対し、神経をとがらせている。2011 年に温泉開発が行われた。土地は 2 RAI で、経営者はピサヌロック出身のタイ人で、開発の途中に本人が死亡し、子息が経営を継いでいる。温泉は地下 3 m から湧出しているが、地元民からの反対運動があつて、開発は留まっている。この開発地の隣に土地を販売した地主が住んでおり、開発地は 2,000 万 B で売却を行った。他にも 4

RAIほどの土地を売却する計画である。

## (2) 温泉・宿泊施設関係

泉温は84℃で、2カ所から自然湧出し、泉質は硫黄泉である。温泉施設は普通浴室(5カ所)・特別浴室(2カ所)である。1人当たりの入浴料は前者は30B、後者は70Bである。1日当たりの利用は少ない時で10人～20人、多い時で100人程度を数え、マッサージの利用は20人程度である。温泉利用客はタイ人と日本人が多く、欧米人はチェンライからの帰路に立ち寄るケースが大半である。タイ人は常連客が多く、日本人はチェンマイ在住者である。宿泊施設はキャンプ場だけで場所代は50Bであり、12月のオンシーズンでは20程度のテントが立ち並ぶ。

## (3) 経営数値

温泉施設などを経営するグループの年商は約50万Bを数える。しかし、売上の半分は土地代や利用料として村や国へ差し出している。年商からみたオンシーズンは12月と1月、オフシーズンは4月となる。マッサージは120B/1時間で、100Bはマッサージ師の取り分で、20Bは村の収入となる。温泉は7対3の割合で、7割が担当者の収入となる。竹の子を蒸すグループの年商は25万Bを数える。利益は8万Bで、残りは土地の使用料を村や国へ支払っている。販売先はチェンマイであり、主婦を主体とした仕事とはいえ温泉ビジネスとして定着している。

## (4) その他

普通浴室に入浴する夫妻の話を聞くと、チェンマイからのタイ人で、週に1回は夫婦で入浴をすると言う。普通浴室は浴室ごとに体裁が異なっていた。ドイサケット温泉はチェンマイに近接し、交通条件に優れている。そのため、外来資本が開発の機会を狙っており、村人たちはこれに対して懸念を持っている。現状のままのどかな農村の中での温泉利用を希望しており、農村風景などを活かした持続可能な温泉地として機能して欲しいと思う。

## 7 むすび

以上、タイ・チェンマイ周辺、特に北西郊・北東郊において3軒の温泉施設を事例として、その開発の実態と経営状況の概要を把握した。その結果、次の点が明確になった。

- ①温泉施設の立地は、それぞれ山間部・国立公園・農村地帯で、自然環境に優れている。
- ②温泉は自然湧出で、いずれも河川の河床から湧出している。
- ③温泉は硫黄泉で、高温であり、湧出量が多い。
- ④村人は、当初、かけ湯として温泉を利用した。
- ⑤宿泊施設は従来キャンプ場が中心だったが、コテージやホテルが整備されつつある。
- ⑥温泉施設は露天風呂(水着着用)やプールが主体だが、2カ所の温泉施設では日本流の個室タイプの浴場が整備され、裸入湯が可能である。
- ⑦経営者のタイプは様々で、中国人(潮州系)・政府系(国立公園)・地元民である。
- ⑧年商など経営数値は1軒だけ把握したが、売上は順調で、他の2軒も好調と思われる。
- ⑨シーズンは乾季と冬季がオンシーズンで、雨季がオフシーズンとなる。
- ⑩現場のスタッフは、職務に打ち込んでいる感が強く、女性のスタッフが多い。
- ⑪全体的に日本人の利用は少なく、チェンマイに近いドイサケットでは利用が目立った。
- ⑫今後の課題として、温泉施設の継続的な調査を行うことで、タイ北部における温泉地の一般的な傾向の把握、入湯客に対するインタビュー調査などを実施したい。

## 参考文献

- 1) 浦達雄・小堀貴亮・中山三照・ポーパンテップ(2012):「タイ・サンカンペン温泉における温泉観光開発」温泉地域研究、第18号、25～30頁。
- 2) 地質調査所(1987):「タイ北部における温泉地の分布」同所。

## シンポジウム

## 下呂温泉の街づくりの工夫

- コーディネーター : 石川理夫 (温泉評論家)  
 パネリスト : 瀧 康洋 (下呂温泉観光協会副会長)  
 : 斉藤正己 (下呂温泉開発協同組合副理事長)  
 : 古田靖志 (下呂発温泉博物館名誉館長)

## 1 はじめに

2012 (平成 24) 年 11 月 25 日 (日)・26 日 (月) の 2 日間、岐阜県下呂市の下呂温泉で開催された日本温泉地域学会第 20 回研究発表大会の最終日午後、「下呂温泉の街づくりの工夫」と題し、地元の多数の参加を得てシンポジウムを行った。

全国に名の知られる下呂温泉の「下呂」という地名の由来は、平安初期にまとめられた『続日本紀』宝亀 7 (776) 年に「下留 (しものとり) の駅を置く」とある。温泉自体の記録は、室町時代の五山の禅僧・万里集九が著した詩文集『梅花無尽蔵』に、「予在飛之温泉、所在曰益田 (ました) 郡下檜郷…熱湯靈験百病除…」 「本邦六十余州、毎州有靈湯、其最者、下 (上の誤り) 野之草津、津陽之有馬、飛州之湯島 三処也」 (ゴシックは筆者) と記されたのが最も古い。万里集九は 1491 (延徳 3) 年 8 月に飛州 (飛驒) の「湯島」=下呂温泉に入湯している。

万里集九の記述を引用するかたちで江戸初期に林羅山が、「我が国諸州湯泉有り、其の最も著しい者は、撰津之有馬、下野之草津、飛驒之湯島、是三処也」と記したので、有馬、草津、下呂の三温泉が「日本三名泉」と称されるようになった。

飛驒 (益田) 川の川床から湧いていた下呂温泉はたびたび洪水に見舞われ、旧湯之島村共同の湯坪が埋まるなど被害を受けた。1928 (昭和 3) 年からは外部資本と提携して掘削で湯量を確保できるようになり、内湯

化が始まった。1930 (昭和 5) 年には岐阜～下呂間の高山線が開通し、観光客が増大していく。

下呂温泉の歴史を簡潔に紹介したが、シンポジウムでは各パネリストから下呂温泉の概況説明に始まり、温泉資源の保護、確保をはじめこれまでのさまざまな取り組みや教訓を共有していくために報告をいただいた。また、会場からも発言、提言を受けている。以下、その内容の要旨を報告する。

## 2 下呂温泉の湧出メカニズムと特色

最初に、下呂発温泉博物館名誉館長で本学会理事でもある古田靖志氏から、下呂温泉の概況説明と温泉湧出のメカニズム、温泉の特色等について詳しい報告を受けた。

下呂温泉は岐阜県の 4 分の 1 を占める濃飛流紋岩という火砕流堆積物、火成岩帯に位置している。これは 6500 万年前の噴火ででき、ちょうど恐竜の絶滅期にあたりと考える学者もいる。そこに 60 キロほどの阿寺断層が走り、端の折れ曲がった所で下呂断層や湯ヶ峯断層に枝分かれしている。その下呂断層を通じて温泉が地上に湧出している。

古い泉源と現在も利用中の泉源分布図を示すと、とくに下呂断層が東西に分かれる下呂東断層に沿って泉源が並んでいる。今は 300m ほど掘っているが、昔は川床から自然湧出していた。したがって常に洪水との闘いで、頑丈な源泉塔を築いてきた。

現在の下呂温泉水の起源は、一つは飛驒川



の河川水起源。高温で量が多い。一つは、周辺の雨水起源のもの。これは温度も量も多くない。もう一つは、地下の熱水だまりと河川水が混合したもので、高温かつ湯量が多い。以上の三つが考えられる。全体には飛騨川の河川水の寄与が大きい。それが地下に浸透し、温められて湧き出すまで40年くらいかかるとされる。このワンサイクル40年で考えると、汲み過ぎは湧出量減少につながっていく。

次にその温泉水の熱源を考えると、活火山の御岳は遠い。活火山ではないが近くの湯ヶ峯は10～12万年前まで火山活動が見られ、地下岩体はまだ冷え切っていない。これが熱源と考えられるので、下呂温泉も火山性の温泉の範疇に含めてよい。

泉質は主にアルカリ性単純温泉。集中管理源泉配湯の泉温は55度。pHは9.1。全体で毎分3200L（一日約5千トン）の湧出量を保つ。硫化水素臭があるのも新鮮な源泉の証拠である。肌がつるつるする美肌湯で、これは単純温泉ながらNaイオンと炭酸水素イオンが多くて重曹成分を構成しつつ、CaやMg、塩素イオンは少ないことがつるつる感を増している。

古田氏の報告は街づくり経過にも及ぶが、それは後にまとめて報告する。

### 3 観光振興に一元化と広域・官民連携

続いて、下呂温泉観光協会の伊東裕会長の代理としてパネリストに加わった瀧康洋副会長から、下呂温泉の観光状況や集客への取り組みについて報告を受けた。

瀧氏は、観光旅行業界の環境的な変化を指摘する。これまでのように個々の宿・施設がばらばらにPRや集客イベントをやっているのはだめな時代になっており、第一に情報の一元化をはかって、温泉地全体でキャンペーンに取り組む必要性を提起した。そのためにも観光振興に向けた協力体制が必要である。下呂温泉では大震災以降毎月必ず1回関係団体

会議を行うよう努めている。そして従来であれば4月に入ってから年間計画を立てていたのを今では前年の12月から計画を立て、4月からすぐ実行できるようにしている。

さらに広域連携したキャンペーンが重要である。JRや県と連携し、タイアップ参加で中京圏のショッピングモールに出展。さらに県と一緒に官民一体の協働実施によるキャラバンを編成して、中部・北陸から関西、九州、関東まで出かけていった。もう一つは、CM、ラジオテレビ、雑誌などを連動したメディアミックスで取り組むこと。これによってお金を回し合せて、効率化と経費削減にも成果が出ている。

下呂温泉宿泊者は、平成22年度（2010年4月～2011年3月）が国内客94万1549名、海外客2万2820名だったのに対して、東日本大震災後の平成23年度（2011年4月～2012年3月）は海外客が8280名で前年度より1万5540名（7割）減、国内客は99万5081名で5万3532名増えた。合わせて100万人台を回復し、前年比103.94%増だった。

下呂温泉は被災地にタンクローリーで8日間、温泉の出前を行っている。大震災後の5月以降は地元岐阜をはじめ中京圏、長野、静岡、関東からの宿泊客が増え、関西からも増えた。これは近場に集客の力を入れた成果でもある。エージェントからは「関西から見れば下呂は東なので客は来ないだろう」と言われた。しかし大震災で人々の心が病んでいるからとにかく下呂温泉に来ていただいて心身を癒してもらおうということで、ラジオを中心にCMを打ったところ、5月以降お客さまが増えている。海外客については、下呂は安売りはしたくないので100万人のうち5万人に来てもらえればと考えている。

瀧氏からも街づくりの詳しい取り組みを報告いただいたので、まとめて後に報告する。

## 4 街づくりに貢献した温泉集中管理

瀧氏と同じ観光協会と旅館協同組合の副理事長でもある下呂温泉開発協同組合の斉藤正己副理事長からは、下呂温泉の街づくりの歴史の中でも最も大きな成果とみなされる集中管理について先人の取り組みから現状まで報告を受けた。

下呂の活性化の源で宝物は温泉で、未来永劫ではなく有限な資源である。それを長く利用していけるように15年の歳月をかけて話し合い、1974（昭和49）年から集中管理事業が始まった。これを担うのが下呂温泉事業協同組合で、組合員58名、90軒の旅館等に源泉を供給している。その10年後、源泉所有者18名主導で下呂温泉開発協同組合をつくった。

集中管理の実現には、所有者も湯量も泉温も異なる各源泉をどう公平に評価するかという難しい課題があったが、「森方程式」によって絶妙なバランスをとって解決した。集中管理事業により以前は3倍あった源泉は湯之島地区と幸田地区の14カ所（現在は12本の管理源泉）に絞られ、資源保護に貢献している。配湯管の総延長1万m。温泉街を網の目のように走り、そのおかげで温泉街に足湯7カ所や手湯を各所につくり、「温泉環境あふれる温泉地」を実現させている。

現在心配なのは配湯後のレジオネラ属菌の問題で、下呂温泉全体の信頼にかかわるので半年に1回ずつ各浴槽検査を抜き打ちで実施している。そして各旅館施設には使わなくても衛生面を確保できる割当量を決めている。

## 5 街歩きを促す工夫

温泉地の特徴は温泉があること、温泉街には温泉がないときびしい、それに応える温泉環境の良さを感じてもらえる街づくりを工夫している、と古田氏が指摘したのは報告者に共通する思いであった。足湯が温泉街に多いため、街歩きのカップルが一緒に憩える。また、集中管理のタンクにも温泉の状況を観

光客に見せる工夫がなされている。

古田氏は、下呂温泉に温泉博物館ができたのは、見学して温泉を楽しく理解してもらうことでとりわけ将来の温泉地を担う子供たちが育ってくればという、湯之島地区で源泉を掘削供給する下呂温泉株式会社（社長は本学会会員の川上裕惟氏）の高い志によるものだと報告した。

斉藤氏は、街づくりにはとくに景観形成が大事と指摘する。景観は住んでいる人のセンスの集大成で、訪れる人の心に安らぎを与える。以前に下呂を訪れた人から、周りの山には木が多いのに街中には木が少ないと指摘された。そこで一丸となって木を植えることに一生懸命に取り組んできた、と報告した。

街づくりにはさまざまなおもてなしの工夫が欠かせない、まだまだ下呂温泉はその点で十分ではない、と瀧氏。下呂市は2010（平成22）年3月に「ホスピタリティ都市宣言」をして、おもてなしの心を啓発することを小中学生に対しても呼びかけている。温泉街では滞在時間を増やしてもらうために、街歩きを誘発する滞在プログラムを今後の取り組みとして提案していると瀧氏。つまりヘルスケア、半日観光といったニューツーリズムの促進である。

「まったりゆったり 下呂温泉癒しの足湯、味覚さんぽ」も街歩き推進の取り組み例の一つ。温泉街各所にある足湯を探訪、体験しながら、南飛驒の名物、各店自慢の味覚を味わってもらおうというものだ。街歩きパンフレットにはいわゆるB級グルメ「Gシリーズ」が載る。地域の食材を使った和洋中の特色あるメニューを下呂温泉街の食スタイルとしてアピールしている。

また、ヘルスケアのほうでは、2011（平成23）年度に検討委員会を立ち上げており、ヘルスケアプランの販売に向けて準備している。一例は、「美湯・美食・美体験」をテーマに温泉体験に食とトレッキングを組み合わせ身体の内側から“きれいになる”ことを

目的としたプランが挙がる。健康と食と温泉は滞在型プランに欠かせないものであろう。

古田氏も、下呂温泉では温泉以外には何かないのか、とよく家族連れから聞かれると言う。下呂は「温泉で売り出す」という基本はおさえつつ、瀧氏が報告・提案するように、下呂温泉ならではの気さくなおもてなし（メニューやプログラム）を豊かに打ち出すことで、温泉街の統一感あふれる整備とともに街づくりに寄与していければというのが、共通の課題であろう。そのことをシンポジウムでは全体で確認することになった。

（文責 石川理夫）

## 温泉地情報①

### ヨーロッパ温泉訪問記

赤池勇治 (静岡県庁)

#### 1 はじめに

2010年4月から2012年3月まで仕事で駐在した英国を拠点に、ヨーロッパの温泉地を巡る機会を得た。そのうち、ユニークなものをつく簡単に紹介する。

#### 2 アイスランド

巨大露天風呂「ブルーラグーン」から徒歩数分の場所にある「ブルーラグーンクリニック」は宿泊施設を併設。温泉は患者及び宿泊者専用で、ブルーラグーンより混んでなく快適だ。温泉は海水由来で塩分濃度が高い。さらにシリカを251mg/kg含み、これが乾癬に効果があると認められ、治療には2～4週間の滞在が推奨されている。

また、レイキャビク市内には温泉プールが数か所あり、出勤前にひと泳ぎする市民も多い。プールの他に5、6人が入れる浴槽を備えているところもあり、欧州には珍しい高温浴槽(42～44度)があったのには驚いた。



写真1 一番手前が高温浴槽  
(注) 筆者撮影。2011年2月。

#### 3 イタリア

ナポリから高速船で50分の距離にある温泉の島・イスキア。29の温泉地、69の噴気孔がある。宿泊したホテルでは医師の診断の後にファンゴ治療や温泉吸入治療を体験。

足を伸ばした島南部のマロンティ海岸では、浜辺の砂から湯煙が立ち込めていた。岩盤浴のような要領で、砂の上に布を敷いて寝転び、汗をかく人がいる一方、熱い砂の中にチキンや卵を埋めて“地熱料理”する地元の方もいた。



図1 マロンティ海岸

#### 4 オーストリア

バート・ホフガスタインでは、個室の1人用バスタブでラドン浴を体験。大量の発汗があった。なお、医師の診断がないと2回目以降の入浴はできない。次に、干し草を利用した当地の伝統療法にもチャレンジ。片面がビニール、もう一方が不織布の干し草入りの袋を首・肩と腰の2か所に当て、39度に温められたウォーターベッドに横になり20分。これで肩こりと呼吸器が改善するとか。

また、ラドン坑道治療で知られているガスタイナー・ハイルシュトレンも訪問。脳梗塞を患った後、東京からここに4年間通っている日本人女性は「ろれつが改善し、体もだいぶ良くなった」と嬉しそうに話してくれた。治療には3週間滞在するのが良いそう。医師からは2日治療し1日休憩することを義務付けられるため、今回の彼女は10日間の滞在中に5回、坑道治療を行うとのことであった。この他、ザルツブルクの東80kmに位置す

る人口5千人弱の小さな温泉町パート・ハルでは、特に眼病に効能があると言われている高ヨード含有塩化物泉を利用した目の治療（イオン浸透療法）を体験。眼を開け温泉水（36度）に浸けて7分、皮膚に微弱な電流を流し、ヨードの粒子を眼の奥まで効果的に導入。治療後は目隠しをして10分間休息しつつ飲泉を行った。ヨード温泉に20分入浴し、その後ヨードに浸したシーツに20分包まれるといった療法もあった。

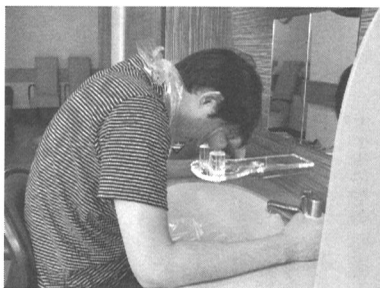


写真2 イオン浸透療法を体験

## 5 フランス

南西フランスの中心都市トゥールーズから電車で南に30分、標高720mに位置する温泉町アクス・レ・テルム。避暑地であり、スキーリゾート地でもある。ここで湧くピレネー山脈で最も高温（78度）で、硫黄とナトリウムを含んだ温泉は、リューマチと打撲後遺症、耳鼻咽喉と呼吸器に効果があるとされる。

訪問した温泉治療施設では、利用者の80%が高齢者だそう。温泉水をうがいや鼻の洗浄に利用している。呼吸器疾患の子供が3年通って完治したという例を教えてくれた。



写真3 鼻の洗浄を実演  
(注) 筆者撮影。2012年3月。

## 6 ポーランド

ワルシャワから電車を乗り継ぎ北西へ3時間、人口1万人の温泉町チェホチネク。ここでは、湧出する塩化物泉（冷泉）を木製の塔（高さ16m、総延長1.74km）の上部に流している。それが、小枝が敷き詰められた壁面を伝ってゆっくりと自然流下。この過程で水分が蒸発し、同時に飛沫も空气中に放たれ、海辺にいるような環境が作り出されている。飛沫の食塩粒子を吸入することで痰が出やすくなり、咳が鎮まることが知られている。この効果を得るため、人々はこの塔の周辺を散歩するなどして過ごす。なお、筆者が訪問したのは零下15度にもなる真冬の12月。塔への冷泉の送出はお休み、飛沫もなかった。



写真4 飛沫を作り出す塔「テズニャ」  
(注) 観光パンフレットより転載。

## 7 おわりに

入浴だけではない、多様な温泉の利用法があることに驚くと同時に、英国ではほぼ廃れた医療的な利用が、まだ大陸諸国では根強く続いていることに感銘を受けた。

さらに、今回訪れたイスキア、パート・ホフガスタイン、パート・ハル、アクス・レ・テルムでは、温泉治療施設だけでなく、温泉プールやスパを備えたモダンな温泉施設も存在、ウエルネスへの温泉利用も確認でき、有意義な温泉地訪問となった。

(注) 【図1、写真2撮影：赤池キョウコ】

## 温泉地情報②

# 人吉温泉と修善寺温泉の広域観光連携構想私案

新田時也 (東海大学)

### 1 九州の中の「小京都」：熊本の人吉

2012 (平成 24) 年 8 月 22 日、人吉市において「九州小京都協議会」の総会が開催された。この会は九州ブロックの「小京都」を紹介、宣伝、キャンペーン等を行っている協議会のことである。全国には「小京都」と呼ばれる「まち」が多くあるが、「京都に似た自然景観・町並み・たぐいまい」、「京都との歴史的なつながり」および「伝統的な産業・芸能」の三要件に該当しないと、「日本の小京都」として「全国京都会議」から正式に認められない<sup>1)</sup>。人吉は、「球磨川、人吉城跡」、「きじ馬、花手箱」等の自然景観や伝統産業により、九州の「小京都」として正式に認められ、加盟している。一方、著者の住む静岡県には、「小京都」として加盟している「まち」が見当たらない。しかし、民間の紹介では、修善寺が「小京都」として取り上げられている。以下、温泉地としての両地の類似性を「小京都」をキーワードに比較することで、「熊本の人吉」と「静岡の修善寺」との広域連携構想私案を提示したい。

### 2 人吉と修善寺の類似性

人吉を流れる急流の球磨川沿いには青井阿蘇神社があり、人吉温泉元湯 (写真 1) をはじめ温泉場が広がり、キクラゲの山の幸にも恵まれている。伊豆の修善寺温泉は、鎌倉二代将軍の頼家が修禅寺 (写真 2) に幽閉された地であり、そのほとりに桂川が流れ、湯治場の歴史があるとともに、シイタケの産地でもある。

また、人吉は相良氏の居城であり、修善寺は源氏にゆかりが深い。これらの人吉と修善寺の類似性から、両地は「小京都」に類似した「温泉地」と考えてもよいのではなかろうか。人吉温泉では、現在「小京都」を観光で売り込むため、①人吉温泉観光協会による人吉案内人力車、②日本百名城人吉お城まつり、③相良三十三観音めぐり、④織月まつり、⑤球磨焼酎出前セミナーなどに取組んでいる。なかでも官民一体の取組みとして、泉極 [せんごく] SAGARAがある。これは人吉球磨温泉めぐりモバイルラリーであり、官民による「ひとよし・くま旬夏秋冬キャンペーン実行委員会」が企画し、各施設に掲示されたポスターのQRコードを携帯電話で読み込



写真 1 人吉温泉元湯  
(筆者撮影)

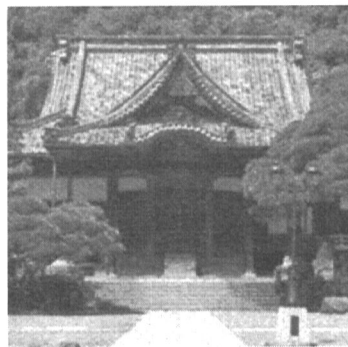


写真 2 修禅寺  
(筆者撮影)

み、制覇湯数を増やして“天下湯一”を目指すことで、「無名武士」からスタートし、施設を多く回ると「相良家傭兵」「筆湯家老」などと階級が上がっていく仕組みの湯めぐりキャンペーンである。「3施設を“制覇”するたびに5千円相当の特産品か人吉産米が当たる抽選の応募権を獲得でき、全施設を制覇すると特製の湯おけと手拭いがプレゼントされる。(熊本日日新聞、2011年11月9日付)。

### 3 人吉と修善寺の連携提案

人吉と修善寺は、「小京都」として「温泉」、「歴史」、「食」の三つの観点から類似している。また人吉は、“天下湯一”の「人吉球磨温泉めぐりモバイルラリー」を展開しており、それは、人吉の相良氏を題材にした「歴史と温泉での地域おこし」である。そこで著者からの提案であるが、人吉と修善寺とは、人吉と牧之原が相良氏で友好都市交流をしているように、人吉の「相良氏」と修善寺の「源氏」という「歴史」の観点で、連携交流をはかれないものであろうか。具体的には、相良氏と源氏を題材としての「人吉・修善寺温泉めぐ

りモバイルラリー」の企画、両温泉地で互いの物産の展示・販売、「食文化」の交流（人吉のアユ、修善寺の黒米等）である。熊本と静岡は、かつてFDA（フジドリームエアラインズ）で結ばれていたし、2012年7月には、静岡市の清水港から熊本港にガントリークレーンが譲渡された。深いつながりの熊本と静岡である。以上を踏まえ、現在、著者は、「温泉」、「歴史」、「食」をコンセプトとして、人吉と修善寺の広域連携の実現を行政・民間と話し合っている。

#### 注

- 1) 昭和60年(1985)に発足した「全国京都会議」によって、正式な加盟基準が「その市町が京都に似た自然環境や景観があること、京都と歴史的なつながりがあること、そして、その市町に伝統的な産業や芸能があること」とされている（「全国京都会議 北から南まで、日本は京都でいっぱい 全国各地の小京都を巡り、歩き、住まう」<http://www.itbags88.com/01/001.html>より引用）。

## 温泉地情報③

## 十二社温泉 — 「奥座敷の温泉」の幕引きとその遺産—

宇田川大介 (東海大学大学院)

## 1 十二社温泉の概略と閉鎖に至るまで

十二社じゅうにしゃは新宿区の西方にあたる淀橋地区のうち現在の西新宿にあり、東京都庁つのはずの西側に相当する(図)。この地区はかつて角筈と呼ばれていた地域の一部で、図にも見える熊野神社の西側にあった十二社池や十二社大滝と呼ばれる池や滝があり、名所江戸百景には「角筈熊野十二社」としても取り上げられるような景勝地・行楽地であった。なお、十二社という地名自体は旧角筈村の鎮守で、現在も同地区内に現存している熊野神社に熊野三山から勧請された12柱の神が祀られていることに由来する。そして、十二社温泉(写真)自体の起源は、戦後復興の一環として十二社三業組合が建設した十二社会館に、1958年に同組合が温泉を開削したことにはじまる。施設は漆塗りの中国式の内装が特徴的な四階建ての大衆浴場で、入浴後に歌唱ショーなどの余興を楽しむという健康ランドに近い娯楽型のものであった。客層は「奥座敷」の言葉が表すように、近隣の旅館の利用者が多かった。泉質は東京都心部に特有と言われている黒湯で、同じ黒湯の泉質を持つ大田区大森海岸付近の掘さく井の泉質に関して、中央温泉研究所の甘露寺泰雄氏は「ソースみたいに黒褐色に着色した水」と表現している。

「江戸の昔は奥座敷」とは2013年現在、十二社に所在する商店会の「十二社商店親睦会」がパンフレットで使用しているキャッチコピーである。十二社はかつて十二社池や十二社大滝と呼ばれる池や滝があり、名所江戸百景には「角筈熊野十二社」としても取り上げられるような景勝地・行楽地であった。十二社温泉は、まさに「奥座敷の温泉」であっ

たと言える。しかし、2009年に温泉法が改正されることとなり、十二社温泉はその改正後の法規制に対応することが困難となったため、同年3月に閉鎖されてしまった。

## 2 十二社温泉と「奥座敷」の遺産

以上のように、閉鎖に至った十二社温泉であるが、その「奥座敷」の残した遺産は、これからの十二社温泉周辺に有益な地域資源を多く含んでいる。一例を挙げれば、十二社温泉を含む淀橋地区は上記にて述べた十二社の池や大滝を抱えていたことは勿論、地区の北方から西方を撫でるように神田川が流れている。

また、淀橋地区を構成する角筈・柏木の両地区(現在の西新宿・北新宿にほぼ相当)には、川に関係すると思われる字名が多く見られるほか、興味深い伝承を持つ地名も見受けられる。

## 3 十二社温泉のこれから

現在では十二社温泉の周辺地域は「副都心」となり、かつての閑静さは無くなってしまったが、これはアクセスが非常に良いということでもあり、さらにこれからの観光まちづくりや地元学など、他分野の進展、そして地域自らが地域資源を活用する方策に乗り出すことで変革が起きるポテンシャルを大いに秘めていることの裏返しでもある。十二社温泉は一度はその歴史に幕を下ろしたものの、これからの地域の動向によっては復活することも大いにあり得るのではないかとと思われるが、2013年現在再興に向けての動きはない。



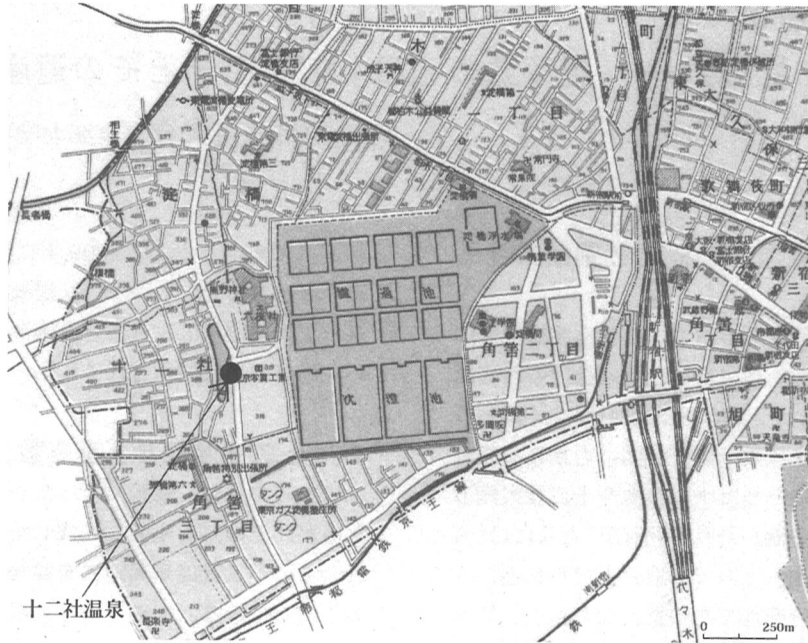


図 終戦直後の十二社周辺

(注) 1951年発行『東京都便覧』による。1万分の1地図。



写真 営業当時の十二社温泉

(注) フリー百科事典 Wikipedia による。

## 学会記事

### ● 日本温泉地域学会第21回10周年記念研究発表大会

平成25年5月26日(日)・27日(月)の両日、日本温泉地域学会第21回10周年記念研究発表大会を群馬県草津温泉で開催します。今回の大会は日本温泉地域学会創立10周年記念の節目の会ですので、多くの会員の参加を期待します。

### 日本温泉地域学会第21回10周年記念研究発表大会スケジュール

開催温泉地：群馬県草津町草津温泉

開催日：平成25年5月26日(日)～27日(月)

発表会場：草津温泉ホテルヴィレッジ TEL.0279-88-3232

宿泊施設：草津温泉ホテルヴィレッジ TEL.0279-88-3232

懇親会場：同上

視察会集合：5月26日(日) 12時30分 草津バスターミナル  
草津温泉街と温泉施設を見学します。

受付：5月26日(日) 17:00～ ホテルヴィレッジ  
5月27日(月) 8:30～ ホテルヴィレッジ

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円

懇親会費：7,000円(学生会員5,000円)。学会指定ホテルを利用する場合、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定ホテルを利用する場合、懇親会費・朝食込みの1部屋2名利用で1人当たり料金は12,000円です。

参加申込：すでに送付した参加の有無を問う葉書は返信されたと思いますが、参加者は郵便振替で学会事務局あてに該当金額を送金してください。

郵便振替番号：00190-6-462149 名義：日本温泉地域学会

交通案内：JR利用者は、上野発9:00の「草津31号」が連絡しています。11:28着の長野原草津口駅で降車、連絡バス約25分で草津バスターミナルに着きます。

研究発表大会に参加される会員は、以下の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を5月20日必着で前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

本年度年会費(賛助会員：3万円、一般会員：4,000円、学生会員2,000円)未納の方は、以下の金額にプラスして送金してください。また、研究発表大会非参加の会員で会費未納の方も送金をお願いいたします。

学会指定宿泊施設泊+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円(学生：13,000円)

懇親会参加+学会参加：7,000 + 2,000 = 9,000円(学生：6,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

郵便振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

## 日程

- 5月26日(日) 視察会、懇親会  
12:30 草津バスターミナル集合  
17:00 会場のホテルヴィレッジで宿泊・懇親会の受付。2名1室:12,000円  
18:30 懇親会。懇親会のみ参加:7,000円(学生5,000)。
- 5月27日(月) 学会10周年記念研究発表大会(ホテルヴィレッジ)  
8:30 受付(会場:ホテルヴィレッジ)  
9:00~11:30 学会10周年記念行事  
11:30~12:30 昼休み(理事会)  
12:30~12:50 総会  
13:00~16:10 研究発表

## 日本温泉地域学会10周年記念発表大会プログラム

- 5月26日(日)  
12:30 草津バスターミナル集合:草津温泉視察(温泉資料館・温泉場の観光ポイントと再開発・時間湯・熱交換施設・中和工場の見学などを予定)。  
17:00 ホテルヴィレッジ着(宿泊受付) 宿泊はツイン室で12,000円(懇親会費・朝食を含む)です。  
18:30~20:00 懇親会(懇親会のみ参加は7,000円、学生5,000円)
- 5月27日(月)  
8:30 受付(会場:ホテルヴィレッジ)  
9:00~10:30 会長挨拶 石川理夫  
草津町長挨拶 黒岩信忠  
学会創立10周年の歩み 山村順次  
学会活動10年をスライドでふりかえる 長島秀行  
会長講演 日本温泉地のこれからを考える 石川理夫  
10:30~11:30 名誉会員表彰・精勤者表彰・賛助会員感謝状贈呈などと会員交流会  
11:30~12:30 昼休み(理事会:30分、会員控室で草津町の紹介、学会員による温泉関係書籍の展示即売など(温泉関係書籍については、終了後、学会と草津町に各1冊を寄贈する))。  
12:30~12:50 総会 司会:浜田眞之
- 記念発表** 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)  
座長:浦 達雄(大阪観光大)  
13:00~13:20 前田勇(立教大名誉教授):ベルツと草津温泉
- 一般発表** 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)  
座長:浦 達雄(大阪観光大)  
13:20~13:40 甘露寺泰雄・大塚一夫(中央温泉研)・稲川裕之(新那須温泉供給):大型露天風呂の適正管理について-草津西の河原露天風呂を事例として-  
13:40~14:00 内田 彩(大阪観光大):近世後期の「廻り湯治」に関する一考察-草津温泉を中心として-

- 14：00～14：20 石川理夫（温泉評論家）：箱根の温泉霊場「姥子の湯」にみる温泉地の聖性と共同性
- 14：20～14：40 樽井由紀（奈良女子大）：温泉にまつわる信仰
- 14：40～14：50 休憩
- 座長：中山昭則（別府大）
- 14：50～15：10 高柳友彦（一橋大）：温泉資料の保存と活用ー地域史研究を通してー
- 15：10～15：30 新田時也（東海大）・上原一晃（上天草市役所）：「温泉」と「食」を活用した上天草の観光地域づくりー上天草弓ヶ浜温泉「湯の宿・湯楽亭」を例にー
- 15：30～15：50 宇田川大介（東海大院）：文脈棚の概念を用いた街歩きツアーの構築とその考察ー伊豆・修善寺温泉を例にー
- 15：50～16：10 王 徽（高崎経済大研）：日本文化の特性を活かす中国語版パンフレットのあり方ー温泉観光地を事例としてー

- 日本温泉地域学会第20回研究発表大会は、平成24年11月25日（日）・26日（月）両日、岐阜県下呂市下呂温泉で開催されました。初日のエクスカージョンでは、本学会理事の古田靖志氏の案内で下呂温泉地域を徒歩で巡りました。飛騨川河床の露天風呂を眺め、対岸の温泉街を経て高台の老舗の湯之島館を訪問しました。紅葉が見事な傾斜地に和風旅館が広がっており、女将の案内で落ち着いた雰囲気のある客間や浴室を見学しました。山麓の10世紀中葉の開基という医王靈山温泉寺は薬師如来を祀っており、その足元から温泉が湧きだしていました。近くの「下呂発温泉博物館」は、古田氏の指導のもとに温泉を科学するユニークな温泉施設が開館したもので、教養観光のモデル施設とも言えます。

懇親会と翌日の研究発表会、シンポジウムは宿泊した水明館で行われました。滝社長の全面的なご配慮のもとに、会員一同楽しくも実のある時間を過ごすことができ、御礼を申し上げます。

- 温泉観光士養成講座は、前号で記したように草津温泉で第9回の講座が実施されました。新年度も9月初旬を目途に、草津温泉で第10回講座を開く予定ですので、この機会に多くの会員が参加されることを望みます。
- 学会誌「温泉地域研究」第21号（平成25年9月末刊行予定）の論文・研究ノート・書評・温泉地情報などの原稿を募集します。投稿規程（学会ホームページに掲載）に合わせ、学会誌「温泉地域研究」の冊子も参考にして学会事務局宛に原稿を送付してください。学会事務局への原稿締め切りは7月31日（水）必着とします。

なお、学会事務局編集担当のメールアドレス（yamaj@mx8.ttcn.ne.jp）へもワードで原稿を送付してください。

- 次回の第22回研究発表大会の日程は未定です。11月を予定していますが、開催温泉地などは未定です。決定次第、ホームページ上でお知らせいたします。発表を希望される会員は、8月31日（土）必着で発表者名、所属、タイトル、発表内容（100字程度）を葉書に書いて、学会事務局へ申し込んでください。
- 平成25年4月1日より学会事務局の宛名が下記のように変更になります。

城西国際大学観光学部于航研究室内 日本温泉地域学会事務局

メール：yuhang@jiu.ac.jp

電話：04（7098）2840

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般          学生          賛助 (      ) 口
ふりがな 氏                  名	印 (満          歳) 男・女
団体名・商号 代 表 者 名	印
勤務・所属先名称	
所      在      地	〒
	電話                  (          )
	FAX                  (          )
E-mail :	
現      住      所	〒
	電話                  (          )
	FAX                  (          )
E-mail :	
研究・関心分野	
メールでの対応	可能                          不可能
研究会誌送付先	勤務・所属先                  現住所

\*学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内  
日本温泉地域学会事務局  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

## 日本温泉地域学会役員

- 会 長 石川 理夫 (温泉評論家)  
副 会 長 長島 秀行 (東京理科大学)  
理 事 長 濱田 眞之 (国際温泉研究院)  
常務理事 辻内和七郎 (箱根温泉供給)  
山村 順次 (城西国際大学)  
理 事 池永 正人 (長崎国際大学) 市川 栄一 (草津町議会議員)  
市原 実 (聖学院大学) 浦 達雄 (大阪観光大学)  
鈴木 晶 (別府大学) 只野 公康 (妙見温泉どさんこ)  
徳永 昭行 (長野市開発公社) 西村 りえ (温泉ライター)  
新田 時也 (東海大学) 布山 裕一 (日本温泉協会)  
古田 靖志 (下呂発温泉博物館) 松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館)  
山田 等 (聖徳大学) 由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)  
吉野 妙子 (山形県温泉協会)  
監 事 谷口 清和 (温泉地活性化研究会)  
中山 昭則 (別府大学)  
幹 事 小堀 貴亮 (共栄大学)  
内田 彩 (大阪観光大学)  
菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや)

任期：2012（平成24）年6月4日～2015（平成27）年春季大会総会

### 温泉地域研究 第20号

2013年3月31日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市大海1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

名義 日本温泉地域学会

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

# Journal of Studies on Spa Region

No.20  
2013.3

## contents

The 10 <sup>th</sup> Anniversary of the Regional Science Association of Spas, Japan Chairman's Memorial Address on the Occasion of the 10th Anniversary of the Regional Science Association of Spa, Japan .....	Michio ISHIKAWA ( 3 )
The History of the Regional Science Association of Spa, Japan since its Foundation .....	Junji YAMAMURA ( 5 )
Development and Preservation of Hot Spring Resources—Changes in Drilling Technology and Utilization of Hot Spring and Problems caused by Geothermal Power Generation— .....	Masayuki HAMADA (23)
Reflections on Problems of Hot Spring Baths and Hot Spring Bathing through their Present Conditions .....	Hideyuki NAGASHIMA (27)
Changes in Choice of Spa among Tourists and Formation of Spa Region .....	Junji YAMAMURA (33)
Reflections on Problems of Spa Management by Local Governments and Hot Spring Law through their Present Conditions .....	Michio ISHIKAWA (39)
Formation of Medical Care System of Hot Spring in Japan .....	Isamu MAEDA (43)
35 Representative Spas in Japan: their Formation, Present Conditions and Problems .....	(47~117)
<b>Articles</b>	
A Study on the Trend and Problems of the Voluntary Tour Guide in Beppu Spas .....	Akinori NAKAYAMA (119)
Development Process of Tanggangzi Spa in China and its Utilization for Recreation and Cure .....	Yu HANG (129)
<b>Research Notes</b>	
Spa Tourism Development in Chiang Mai metropolitan area, Thailand .....	Tatsuo URA, Takaaki KOBORI, S.THEINGTHAE, Pantira SIGTAIPOB (137)
<b>Symposium</b>	
Ideas Practiced for Regional Improvement in Gero Spa .....	(143)
<b>News on Spa</b>	
Visit to Spas in Europe .....	Yuji AKAIKE (147)
Private Plan for Wider Area Tourism in Hitoyoshi and Shuzenji Spas .....	Tokiya NITTA (149)
Junisou Spa-its End and Heritage .....	Daisuke UDAGAWA (151)
<b>Notes and News</b> .....	(153)

Regional Science Association of Spa, Japan

c/o Department of Tourism, Josai International University, Kamogawa 299-2862, Japan